津山藩抱え絵師鍬形蕙斎紹真の研究序説

小澤　弘

一、『浮世絵類考』と浮世絵師個人別研究について

江戸時代に成立した近世庶民藝術といわれる「浮世絵」、この浮世絵は肉筆画と版画とに作画様式が大別されるが、そのどちらもが近世文化を研究する上で重要な資料となるものであり、また今日に伝承された貴重な有形文化財である。

これらの大量に制作され流布した浮世絵の、その画を描いた絵師、すなわち「浮世絵師」についての研究はこれまで数多くなされてきている。その総覧的な研究の最初のもの、浮世絵の画人伝ともいうべきものが『浮世絵類考』(1)である。『浮世絵類考』は、寛政元年（一七八九）頃に大田蜀山人が原撰したものとされるが、その原本は不明であり、よく知られている文化十二年（一八一五）写しの曳尾庵本には三十七名の浮世絵師が所収されてい

るという。[2] また、それより十二年も古い享和三年（一八〇三）頃に成立したというT氏所蔵写本[3]によれば、「浮世又兵衛」の異名をとった岩佐又兵衛勝以を筆頭に、「浮世絵の祖」たる菱川師宣、「江戸絵の祖」と評された鳥居清信などの合計五十三名の絵師について所載されている。当時の浮世絵師評価に関わることなので、その全ての記載絵師の名を左に掲げた。もっとも岩佐又兵衛は、浮世絵の源泉としての位置を占めているものの、浮世絵師の仲間には入らない。なお所在地を特記した者以外は、全て江戸在住である。

岩佐又兵衛・菱川吉兵衛師宣・鳥居清信・英一蝶・京都の西川祐信・大坂の橘守国・鳥居清経・清忠・清重・清勝・清次・清久・清定・清広・清房・清時・清定（之カ）・清政・古山師政・近藤助五郎清春・奥村文角政信・奥村利信・西村重長・二代目橘守国・冨川房信・石川豊信秀葩・大坂の長谷川光信・勝川春章・鈴木春信・湖龍斎・一筆斎文調・柳文調・歌川豊春・大坂の竹原春朝・勝川春湖・栄之・北尾重政・恋川春町・喜多川歌麿・写楽斎・勝川春英・政演・政美・窪俊満・勝川春好・豊広・豊国・二代目宗理（北斎）・国政・補遺として宮川春水・勝川春水・勝薪水・俗名金次（鶴岡蘆水）

この浮世絵の根本資料ともいうべき『浮世絵類考』につづく研究が、昭和六年刊行の井上和雄・渡邊庄三郎編の『浮世絵師伝』である。これは百三十余名の浮世絵師について調べた画人伝である。そして、昭和三十六年に鈴木重三の『日本版画便覧』（『日本版画美術全集』別巻、講談社）が、昭和四十六年に吉田暎二の『浮世絵事典』が出版されて浮世絵師人名事典として便利に供した。その後、文化十一年―文政元年（一八一四―一八）頃に成立したと推定される歌舞伎役者瀬川富三郎の自筆本「諸家人名江戸方角分」（国立国会図書館所蔵）が中野三敏により発見され、ついで昭和五十二年に刊行されて、貴重な江戸の人名録を公表した。この中に百九十三名の画人が提示されており、写楽をはじめとする浮世絵師研究に多くの素材を提供した。[4]

さて浮世絵師の個人別研究は、フランスから起こったともいえよう。それは、江戸時代の鎖国政策のなかで、特別に長崎貿易を通じて国際文化交流が行われたが（江戸では長崎屋での交流が大きい）、その中でも日本から西ヨーロッパに対して大きな文化的な影響を与えたものの一つに「浮世絵」があった。たとえばシーボルトやフィッセルの持って帰った浮世絵、あるいは江戸後期から明治にかけて輸出の陶磁器の梱包用に使われた浮世絵の反故などが海を渡って西ヨーロッパ社会に入った。その浮世絵がフランス後期印象派の画壇に多大な影響を与え、ジャポニスムを形成したという国際文化交流については、周知の事実である。このためフランスではとくに浮世絵に対する関心が高まり、興味ある作品群を描いた特定の浮世絵師への調査・研究が進められたのである。その最初のものは、フランス人ゴンクールによる明治二十四年（一八九一）に刊行された歌麿の作品集と画人伝ともいうべき『歌麿』[5]である。ゴンクールは、また明治二十七年に『北斎』を著している。これにつづいて、ドイツ人のクルトが『歌麿』[6]（明治四十年）や『写楽』『春信』（共に明治四十三年）を著した。

それに対して日本では、明治二十六年に飯島虚心が『葛飾北斎伝』[7]を著し、画人伝の基礎研究方法を確立した。飯島は、『浮世絵師歌川列伝』（稿本、没後昭和十六年に刊行）や『河鍋暁斎翁伝』（稿本、昭和五十九年に刊行）など浮世絵師の基礎的研究をつぎつぎと行った。それにつづいて、仲田勝之助の『写楽』（大正十四年）、内田実の『広重』（昭和五年）、楢崎宗重の『北斎論』（昭和十九年）、平野千恵子の『清長』（昭和十九年）などが発表され、それ以後は主要絵師やその門人、あるいは画派の研究が多くの人々によってなされるようになってきている。しかし、大掛かりに作品の総リストや年譜を作成したという研究[8]は、その対象絵師が、師宣や六大浮世絵師（春信・清長・歌麿・写楽・北斎・広重）など、華麗な作品を残した絵師たちに偏る傾向があったのである。

こうした個人別研究の動向に一石を投じたのが、楢崎宗重を中心とする日本浮世絵協会の研究者たちによる、

浮世絵師の総覧たる『原色浮世絵大百科事典』全十一巻の編纂であった。これにより、従来の個人別研究を集大成した浮世絵師伝をはじめ、浮世絵の通史、作品の様式、彫師、摺師、版元、改印、あるいは浮世絵自体の絵解き（読み解き方）などに、多くの英知が寄せられ編集されたのである。その第二巻「浮世絵師」には千七百もの浮世絵師の画号（一人の絵師が複数の画号を用いる場合が多いので、これが浮世絵師の実数とはいえない）が所収され、またその大部分に家系・生没年・作画期・別号・俳号等・画系・画歴・門人への影響・参考文献・代表作品名などが記され、まさに現代の『浮世絵類考』ともいえるものである。

しかし、大部分の浮世絵師については、その没年はまだしも、生誕年や出身について定かではない。これはひとえに、それを裏付ける資料が現在不明なためである。その理由は、第一に江戸では大火が頻繁に起きたがゆえに町の「人別改帳」や旦那寺の「宗門改帳」「過去帳」など、個人の基礎資料や記録などの文献資料がほとんど伝存しないこと。第二に、浮世絵師の社会的地位や身分の低さ[9]から浮世絵師の活動情報が、公的資料に残りにくい性格をもっていたことなどがあげられよう。

さて、本稿では先述した『浮世絵類考』の大田蜀山人の原撰本に近いT氏所蔵写本に所収されている、北尾派の浮世絵師「政美（まさよし）」で、のちに津山藩松平家の抱え絵師となった鍬形蕙斎紹真を取り上げることとする。その理由は、第一に北尾政美という浮世絵師が、当時狩野派の門人ではないのに、大名家のしかも親藩の御用絵師に登用され、その職を世襲化したこと[10]。そして、このことは浮世絵師として希有のことであること。

第二に、そのことから江戸ではおそらく残りえなかった鍬形蕙斎紹真（以下、必要のないかぎり蕙斎と略称する）の記録が国元に伝存するということ。これは、現在岡山県の市立津山郷土博物館に津山藩松平家の江戸屋敷[11]関係と国元関係の膨大な文書や記録が「津山松平藩文書」（「愛山文庫」）として所蔵され、幸いなことに蕙斎の記録も

その中にあり、近年田中達也によってその一部が紹介された。[12] しかし田中論文では、その資料を実際に見て引用したのではない[13]し、またそれ以外の蕙斎関係の資料が「津山松平藩文書」にはあり、平成二年七月と十一月に現物を精査しうる機会がもてたこと。

第三に、紹真が文化六年（一八〇九）に描いた肉筆画「江戸一目図屏風」六曲一隻（津山郷土博物館所蔵）は、近世絵画史上における真写主義[14]を実践した俯瞰的都市景観図であり、またこの作品は日本山水図の確立と考えうる作品の十六世紀初頭の景観を描いたとされる雪舟等楊筆の「天の橋立図」と、伝統的な四季絵と名所絵とに歴史的事象を組み込んだ平安京の都市景観図である十六世紀中葉の狩野永徳筆と伝える（私は永徳工房制作説をとる）上杉本「洛中洛外図屏風」六曲一双の、延長線上にたつ重要なものであること。したがって、蕙斎はそれをなしえた技量をもった絵師であり、どこからそれを学び実践しえたかという点に興味をもつこと。

第四に、文化元年から三年（一八〇四―〇六）頃にかけて蕙斎が描いた肉筆画「近世職人尽絵詞」三巻（東京国立博物館所蔵）は、田沼政治のあと寛政の改革を推進した老中松平定信（隠居後、楽翁と称した）が依頼したと伝える作品で、その詞書は上巻が四方赤良（幕吏の大田覃、号南畝）、中巻が朋誠堂喜三二（出羽国秋田藩士の平沢常富、狂歌名手柄岡持）、下巻は山東京伝（岩瀬醒、画号北尾政演）という当時評判の戯作者・狂歌詠者が担当し、またその絵巻を楽翁邸で見た平戸藩主の松浦静山の書き記す『甲子夜話』によれば、古き昔の職人尽を写したものでなく、近世つまりこの時代の風俗をそのまま描いたものという特質をもった作品であること。これまた、蕙斎という人物が、日本の近世後期リアリスム画家のなかでもとくに際立った作画態度をとった絵師であったことなどに大いに興味をひかれたこと。

第五に、政美の師北尾重政は黄表紙・絵本類の三百部余の挿絵を描いた版本画家であった[15]が、弟子の政美もそ

れに匹敵する三百五部もの黄表紙・絵本類の挿絵を描いており（後掲の一覧表を参照されたい）、安永・天明期を中心とする狂歌や戯作の展開した江戸文藝界と直接の関わりをもった浮世絵界の北尾派にあって、重要な挿画作家であったこと。また津山藩の抱え絵師となった寛政六年（一七九四）以降も版本挿絵を描いていること。それらのことは、多くの文化人たちと政美（蕙斎）が交流をもったということでもある。

そして、錦絵の誕生する前年の明和元年（一七六四）に江戸で生まれ、現在判明しているのでは安永七年（一七七八）ないし八年に黄表紙仕立の咄本「小鍋立」を嚆矢として作品の制作を開始し（棚橋正博『黄表紙総覧』後篇、四九一頁の棚橋説による）、天明・寛政・享和・文化・文政期に作画活動を展開し（途中、浮世絵師としては破格な大名家抱え絵師に登用されて）、その間多量の版本挿絵を描き、独特の略画を考案し（『略画式』など）、また近世後期のリアリスムたる真写主義に立脚した新しい都市景観図や当世の職人尽絵などの肉筆画を制作し、文政七年（一八二四）に没した北尾政美こと鍬形蕙斎紹真の、個人別研究を行うことによって、この時代の江戸文化形成の実体に迫ることができると考えるからである。

さらに言えば、近世の江戸文化を研究する上で、従来提示されてきた研究資料に加えて、地方に伝存する江戸の藩邸日記などを精査し、その成果を新たな江戸の文化活動の直接・間接の資料として活用することによって、より精度の高い江戸の武家方と町方との文化交流といった行動文化の実体に迫ることに寄与しうるとも考え、その一端として津山藩の蕙斎を中心に据えた関連資料を捜査し活用することも重要であると思うからである。

よって、本稿は「津山松平藩文書」のなかから蕙斎に関する『新参御取立』と、新たに閲覧を許された『江戸日記』の寛政六年・七年を中心にその意義を考察し、また政美の描いた黄表紙などの版本類や肉筆画の一覧表を作成し、抱え絵師になってからの活動の変化や、画号との比較対照により肉筆画の個々の制作期に言及しうる基

礎データを作成し、文化史として私なりの蕙斎研究の端緒としたい。

二、鍬形蕙斎紹真の研究について

鍬形蕙斎紹真についての研究の最初は、昭和七年の星野朝陽の「鍬形紹眞と其筆「櫻下舞姫圖」」[16]である。星野の論文は、出典が明記されていないのでどのような調査をしたかわからないが、昭和七年時点では津山藩抱え絵師となった鍬形蕙斎のデータを良く摑んでおり、また紹真の絵画の特質をすでに指摘しているのである。この星野の蕙斎に関する伝記は、その後の研究者が田中達也を除いて、なぜかほとんど看過してきたのはどういう訳であろうか。むしろ田中論文によって、星野論文が再評価されたことになったのであるが。

星野論文が蕙斎の基礎研究としてすぐれているのは、第一に昭和五十八年に先述した田中論文[17]で神尾齋翻刻提供の『新参御取立』が公表されるほぼ五十年も前に、すでに北尾政美が津山藩抱え絵師として登用された年月日などをすでに正確に把握している点である。それを星野論文から抜き出してみると次の通りである。後述する資料と対比させるため、上部に記号を付した。また後継者の紹意・蕙林についても掲げた。

A「寛政六甲寅年五月廿六日少祿ながらも世人の榮とする士人として、作州津山侯松平越後守康哉（第八世顯徳公）に聘せられ、大役人格御繪師として十人扶持を給せらるゝ」

B「當時大名御召抱の畫人としては、町人藝術たる浮世繪はふさはしからざれば、同九年六月其主康乂（ヤスハル）（即第九世嚴恭公）の命により、新に狩野養川院惟信の門籍に列し、隨て前師の姓を改め、外祖母（在大阪）の鍬形氏を稱し、名も狩野風に紹眞（ツクザネ）とせり」

C「かくて彼は文化八年十二月十八日小従人組に進み」

D「文政三年四月十七日（私注＝『新参御取』では十一日）妻の甥今井萬吉を養子とし」

E「同（文政）七年三月二十二日病死す、年六十一」

F「晩に羽赤と號す、蓋し初姓赤羽の文字を顚用せるなり」

G「淺草新寺町土富店勝軍山蓮華寺（今淺草區永住町十七番地、古義眞言宗密藏院）に葬る、釋謚して「彩淡蕙齋居士」といふ」

H「萬吉赤子と改名し紹意を稱す、紹眞の一字を採れるなり。箕裘を繼ぎ亦畫を能くし、殊に米艦所載の器具雜貨を寫生し其精密を極む」

I「其子金次郎尚ほ幼なり、因りて狩野勝川院雅信の高弟蕙林（名勝永。初名は福島眞太郎、武州榛澤郡永田村生）入りて家を嗣ぐ、彼も亦狩野芳崖特に橋本雅邦と同窓にて親交あり、其主松平確堂侯の樂翁公の集古十種の後を承けて其肖像部（二冊既刊）を編せらるゝや、彼其任に當り之を描き家聲を墜さざりき。惜む可し酷だ酒を嗜み老齢頽然自放、その同窓の晩年玉成大名を揚げしに似ざりしを」

J「此一門の遺骨は市内墓地撤廃のため明治四十三年に府下豐多摩郡野方村大字下沼袋の同寺新墓域に改葬せり」

このように、AからHまでがあたかも「津山松平藩文書」の『新参御取立』など蕙斎関係資料を見たがごとき記述である。しかし、「津山松平藩文書」（「愛山文庫」）は当時まだ松平家所蔵であり、未整理中の膨大な資料のなかから蕙斎関係の資料を閲覧することはほとんど皆無に近かったことから[18]、星野論文はおそらく蕙斎の子孫に聞き取り調査をし、『勤書』の控えなどが伝わっていれば、それを参照したり、あるいは菩提寺の「過去帳[19]」や

墓碑銘を調査したりした成果であろうと推定される。

第二に、鍬形蕙斎の出自に関する指摘があげられる。それは「紹真（ソクザネ）、本姓は赤羽、初名は三二郎（或は修して三二）。父義珍（本姓田中氏、法名覺音成等信士、駿州興津町の人）江戸に出て、疊屋赤羽源左衛門（法名空徹淨翁信士、野州猿子村生）の養子となり、其姓と業とを襲ぐ」という伝記である。また、そのことから「疊屋の三公」の通称や、杉森新道稲荷祠畔に居住していたことから「杉皐（サンコウ）」の雅号を自称したことが記されている点。

第三に、蕙斎の略画法を北斎や広重に先んじたものとして指摘し、その画法を説いた『略画式』の重要性を述べ、また蕙斎が遠近画法を進めて「江戸名所繪や日本一覧圖等の優秀なる鳥瞰圖を工夫して北齋等に模倣せしめ」たことを強調したこと。

第四は、蕙斎が森島中良（江戸幕府奥医師桂川甫三の子甫餐で、甫周の弟）をはじめとした蘭学に関係した江戸の文化人たちとの交流をもったこと。あるいは浮世絵の同門北尾政演（山東京伝）や窪俊満（南陀伽紫蘭）たちとの交流、また狂歌師たちとのそれについても指摘をしている点である。

さて、星野朝陽については昭和十四年の三成重敬と脇本楽之軒との対談「鍬形蕙齋を語る」[20]のなかで、三成が次のように述べている。

「蕙斎の蒐集家研究家といふと、数年前なくなつた星野日子四郎君を思ひ出す。なんでも星野君が蕙斎研究を始めたのは、西洋人から蕙斎のことを聞かれて返事が出来なかつた、それを恥かしい事に思つて発憤したのだといふ、星野君自身の話だつた。星野君は窪俊満論などを書き、蕙斎論も書いて居る筈だが、何に書いたか一寸思ひ出せない」

これによれば、星野日子四郎こと朝陽は『浮世繪藝術』に蕙斎論を著してからしばらくの間に亡くなり、当時

脇本十九郎（楽之軒）が所長をしていた東京美術研究所の雑誌『畫説』の昭和十四年の「蕙斎特輯」のこの対談では、七年前の星野論文が何に掲載されていたか曖昧となっていたことがわかる。

ちなみに、この特集号には森銑三の蕙斎の肖像画と版本に関する論文[21]、飯島虚心著『日本絵類考』にある蕙斎画「江戸一覧図」の先例を横山華山画「華洛一覧図」とする説など蕙斎に関する事蹟について語った三村清三郎の談話[22]、それに五十種の蕙斎の絵本の解説を付した漆山又四郎の論文[23]が所収されていて、星野論文につづく蕙斎研究の成果を特集したはじめての研究論集として位置づけられる。

またこの折、同年九月五日より三十日までの期間、東京美術研究所付設の小陳列所において「蕙斎絵本展観」が行われ、漆山コレクションなど二十九点展示され、蕙斎作品展の最初を飾ったのである。その後の蕙斎論では、田中達也の前掲論文が画期的なものといえよう。

さて蕙斎の作品研究は多々あるが[24]、近年では漆山論文の絵本リストを再検討した狩野博幸の論文[25]や、それに「江戸一目図屏風」を中心に据えて江戸鳥瞰図などの蕙斎の肉筆画について論及した内田欽三の論文[26]があり、蕙斎研究も華やかになってきている昨今である。

三、鍬形蕙斎の津山藩抱え絵師としての登用記録

――『新参御取立』と寛政六・七年『江戸日記』を中心に――

江戸時代の各大名家では、徳川幕府に倣って狩野派一門を御用絵師として登用し、その職を代々世襲させていたが、各藩の御用絵師についての研究は希有である。こうした状況において、守安収の「狩野派の絵画教育―御用絵師を育てたもの」の論考[27]は、狩野派画壇の中央と地方の関係を探り、また大名家御用絵師の実体を究明する

上でも先駆的な研究といえる。とくに備前岡山藩池田家の御用を勤めた狩野三家について、その公務を『奉公書』（岡山大学「池田文庫」）により研究して「御用絵師たちが作品の上で自らの存在を明らかにすることができなかった」状況を推論し、また「職分が名実共にお茶坊主的なものであった」ことを指摘している点は首肯すべきことである。

こうした藩主の側に仕える茶坊主的存在としての大名家御用絵師の職務実体については、津山藩においても同様であり、津山藩御用絵師狩野家についての神尾齋の解説[28]や安藤治の小論[29]は、津山藩における二家の狩野家の動向について、『江戸日記』『国元日記』や『勤書』を引用し論じている。したがって蕙斎が新規召し抱えの御用絵師となった場合においても、当然こうした職務実体を考慮に入れるべきであろう。

それでは、北尾三二（政美）改め津山藩御用絵師鍬形蕙斎紹真となった経緯について、まず津山郷土博物館所蔵「津山松平藩文書」の『新参御取立』にある蕙斎関係の記事を見てみよう。『新参御取立』は、合本帳仕立で、藩の役人が『勤書』などを参照して記したものという。鍬形蕙斎紹真（羽赤）に関する記事は、文政二年（一八一九）までの分の『新参御取立』四[30]と、それ以降の分の『新参御取立』壱[31]とにあり、三部〈資料Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ〉に分かれた書き上げとなっている。また、養嗣子の鍬形赤子の記事は、羽赤（蕙斎）につづき所収されている。[32]なお『鶴山藩譜抜抄』によれば藩士の家を、譜代、古参、古参御取立、士格新参、士格新参並、世代士格、新参御取立の順に格付け分類しており、[33]蕙斎は最下位にあたる「新参御取立」の地位に属するわけである。ちなみに「新参御取立」とは、士格以下に召し出されたのち士格に取り立てられた家のことで、総計五七八家におよぶ[34]という。資料は、箇条ごとに上部へ○に通し番号を付し、下に撮影した写真版を掲載した。また先述した星野論文記載のものと同様な内容をもつ記事は、その箇条の下部に〔　〕へ相応する記号を付した。

〈資料Ⅰ〉『新参御取立』四

後改鍬形

北尾三二

① 一寛政六甲寅五月廿六日大役人格御繪師被　召出御擬作十人扶持被下之家業出精可相勤旨被　仰付候　〔A〕

② 一同日剃髪被　仰付候尤年々絵具代金三両ツ、被下候旨被　仰渡候

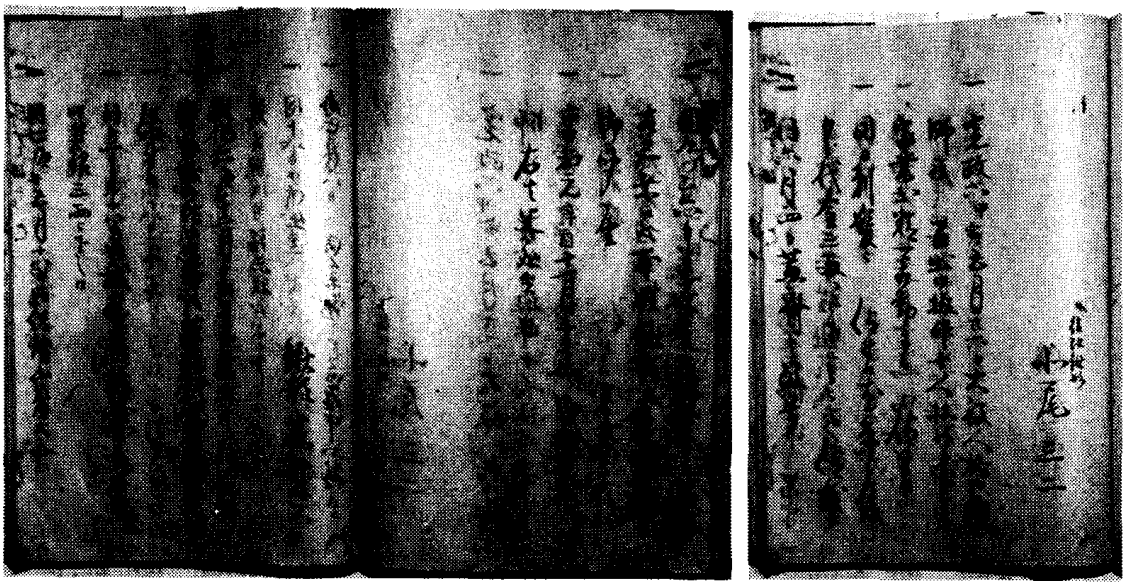
③ 一同六月四日蕙斎与改号

④ 一同九丁巳六月十一日是迄師匠之苗字相名乗候処本姓鍬形与相改申度旨御聞届　〔B〕

⑤ 一享和元年辛酉十一月三日忌御免御成候右者父死去ニ付

〈資料Ⅱ〉『新参御取立』四

鍬形蕙斎



⑥ 一文化六己巳十二月十五日来夏
御帰城御供御道中御茶道代小買物方被
仰付候

⑦ 一同十二月十八日御城御普請繪圖出勤相勤
候付銀三両被下之候

⑧ 一同七庚午五月十八日御供津山著

⑨ 一同七月五日御帰城之節御道中
御賞詞

⑩ 一同廿一日表御座敷向画被　仰付候

⑪ 一同十一月十八日来春
御参勤御供御道中御茶道代被　仰付候

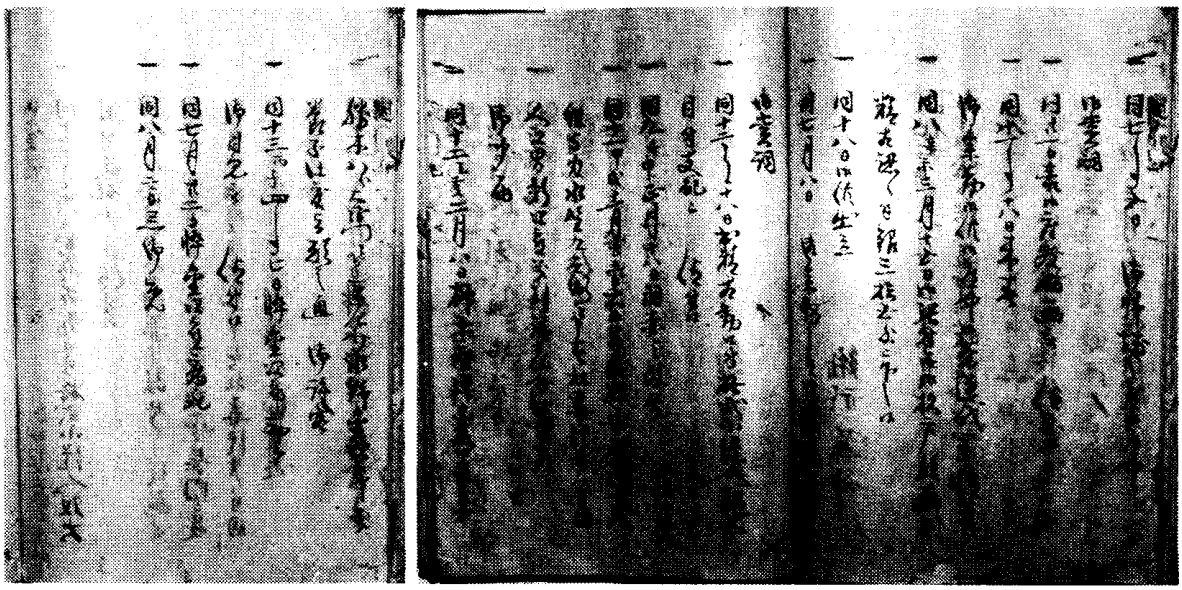
⑫ 一同八辛未三月十五日御張付幷御杉戸類画出
精相認候付銀三拾五匁被下之候

⑬ 一同十八日御供出立

⑭ 一同七月八日御参勤之節御道中出精之旨
御賞詞

⑮ 一同十二月十八日出精相勤候付格式小従人組大
目付支配被　仰付候

〔C〕



⑯ 一同九壬申正月十八日羽赤与改号 〔F〕

⑰ 一同十一甲戌十一月廿三日大御番頭松平長門守殿
組与力水野九兵衛与申者私妻従弟ニ付同
人次男新次郎義引請厄介仕度段
御聞届

⑱ 一同十二乙亥二月八日榊原飛驒守殿御家来
勝木八郎右衛門与申者厄介水野金次郎義
養子仕度旨願之通　御許容

⑲ 一同十三丙子四月七日悴金次郎初而 〔I〕
御目見被　仰付候

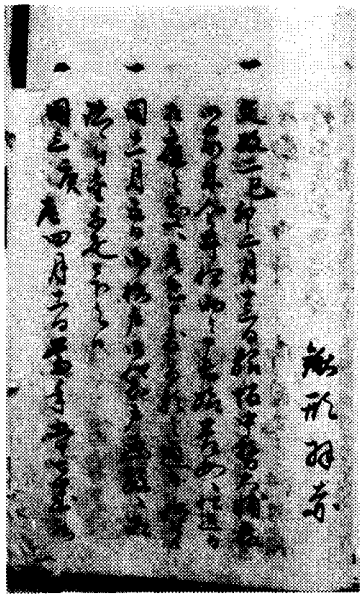
⑳ 一同七月廿二日悴金次郎病死

㉑ 一同八月二日忌御免

〈資料Ⅲ〉『新参御取立』壱

鍬形羽赤 〔F〕

㉒ 一文政二己卯二月十三日脇坂中務太輔殿
御家来今井伊助与申者娘養女ニ仕追而
相應之處へ差遣申度旨願之通被　仰付候



㉓ 一同十一月五日御杉戸御袋戸画数々相
認候付金千疋被下之候

㉔ 一同三庚辰四月十一日當年五十七歳罷
成候處男子無御座候依之脇坂中務
太輔殿御家来今井伊助二男萬吉与
申者當辰廿一歳罷成候尤妻甥之續
二而家業も兼々心懸罷在候間此者養子
仕度旨願之通被　仰付候

〔D〕

㉕ 一同五壬午二月廿五日忰赤子當午二十三歳
罷成候以　御序　御目見被　仰付候様
願書差出御聞届

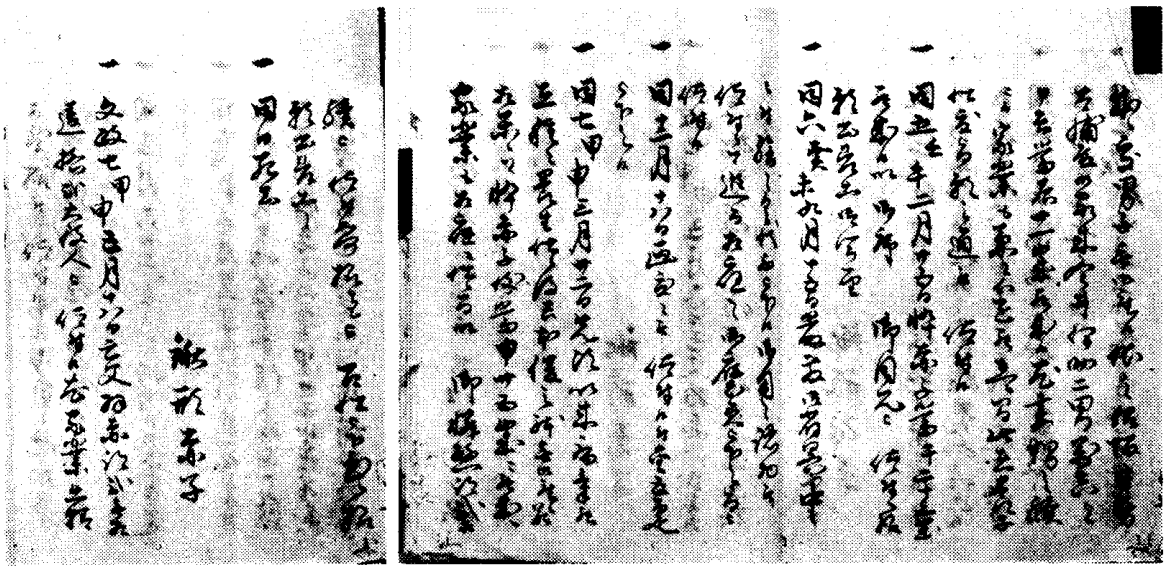
〔H〕

㉖ 一同六癸未九月十五日厳敷御省畧中
二付絵之具代不被下候御用之認物被
仰付候ハ、追而相應之御褒美被下之旨被
仰付候

㉗ 一同十二月十八日画度々被仰付候付金五百疋
被下之候

㉘ 一同七甲申三月廿二日先頃以来病気罷

〔H〕



在種々養生仕候得共本復之躰無御座候若
相果候ハ、忰赤子儀當申廿五歳ニ罷成候
家業も相應ニ仕候間以　御憐愍跡式相
續被　仰付如何様とも被　召仕被下置候様
願書差出之

㉙　一同日死去　〔E〕

さて〈資料Ⅰ①②〉は、寛政六年（一七九四）五月二十六日に、「北尾三二」が「大役人格」の格式で「十人扶持」の待遇にて美作国津山藩主（五万石）松平康哉に御用絵師として新規召し抱えとなり、即日に剃髪を仰せつけられたことが記されている。この剃髪により僧体となることは、将軍や大名に近侍する医師や茶坊主などが仮に身分差を超越する一種の方便である。ちなみに田中論文所収の翻刻文では「刺髪」となっているが、[35]「剃髪」が正しい。ほかに㉒の「相應之處ニ」は「相應之處へ」が正しい。大役人格というのは、津山藩の場合『家臣分限帳』などによれば下級の格式であり、[36]蕙斎は文化八年（一八一一）十二月二十八日に、勤めが出精につき格式を一ランク昇進されて大目付支配の小従人組に出世し⑮、これにより士格となっている。また、文化六年（一八〇九）十二月十五日には翌年夏の藩主の国元帰城に供を命じられ道中の「御茶道小買物方」を仰せつかっている⑥ことからも、蕙斎の登用に藩主の側御用を「茶道」役に準じて勤めることも職務の一つであったことがいえる。このことは、文化七年五月十八日に津山に到着し⑧、道中の御茶道小買物方の役目がうまく勤まり「御賞詞」を受けていること⑨や、翌八年三月十八日出立の江戸参勤⑬への道中でも「御茶道代」を申しつけられていること

⑪からもうかがえよう。この間に表座敷向の画の制作を命じられており⑩、この仕事の一つがあの著名な「江戸一目図屏風」であるとされ、またこの図の現状は屏風仕立てであるが、田中達也は「もと城内襖絵であったらしい」[37]としている。この「江戸一目図屏風」の第一扇下右端に「文化六己巳　紹真圖」の署名と「紹真」の印が捺されているが、推察するに文化七・八年期の津山への帰藩に随行することを申し渡された蕙斎が、その前年の文化六年に江戸で「江戸一目図」を制作し、その図を「めくり」の状態のまま津山へ持参し、津山城の「襖絵」としたのではないであろうか。それを田中の推論するように、「屏風」絵として仕立て直したものが現存状態のものであろう。つまり江戸で制作されたものであったからこそ、「江戸一目図」の描写内容が細密詳細であることに納得がいくのである。ちなみに、金沢文庫所蔵の「徒然草図屏風」に「於津府」とあることから、蕙斎が津山滞在中に描いた作品とされる。

また抱え絵師となって八日目の六月四日に、「蕙斎」と号を改めている③が、姓は「北尾」のままであり、この浮世絵師としての画姓を改めるのは、寛政九年（一七九七）六月十一日である④。この時に「鍬形」へ改姓が許されているが、これは狩野派でない絵師を御用絵師として登用したことの、幕府に対する津山松平家の配慮が働いたものと思われる。ちなみに「北尾蕙斎」の画号では、寛政六年十二月に『諸職画譜』を版行している（後掲の「北尾政美（鍬形蕙斎紹真）の肉筆画・版本関係編年一覧表」のNo.B220を参照されたい）。

さて、「津山松平藩文書」の架蔵にかかる膨大な津山藩の江戸藩邸の日記のなかから（虫食いなどの状態のあまりよくないが）『江戸日記』の寛政六年と七年分を通覧できたので、蕙斎関係の記事をあげてみることとする。

『江戸日記』は、延宝九年（一六八一）より明治元年（一八六八）十月まで、途中欠けている年もあるがほぼそろっており[38]、一年分が、正月から六月分と、七月から十二月分との二冊仕立になっているものが多く、江戸研究

のための貴重な資料を提供してくれるものである。しかし、残念なことに状態があまりよくなく、早く裏打ち表装をして保存し、また翻刻出版されることが望まれる。

寛政六年『江戸日記』（「愛山文庫」〇一八一）は、表紙に「寛政六甲寅年／江戸日記／従正月至六月」とあり、そのなかの五月二十六日の条に、北尾三二が津山藩江戸詰年寄黒田要人宅において御用絵師として仰せ渡しがあったことが記事として載る。そこでこの日の日記を翻刻し、かつ写真版を下部に掲載した。

〈資料Ⅳ〉『江戸日記』寛政六年五月二十六日の条

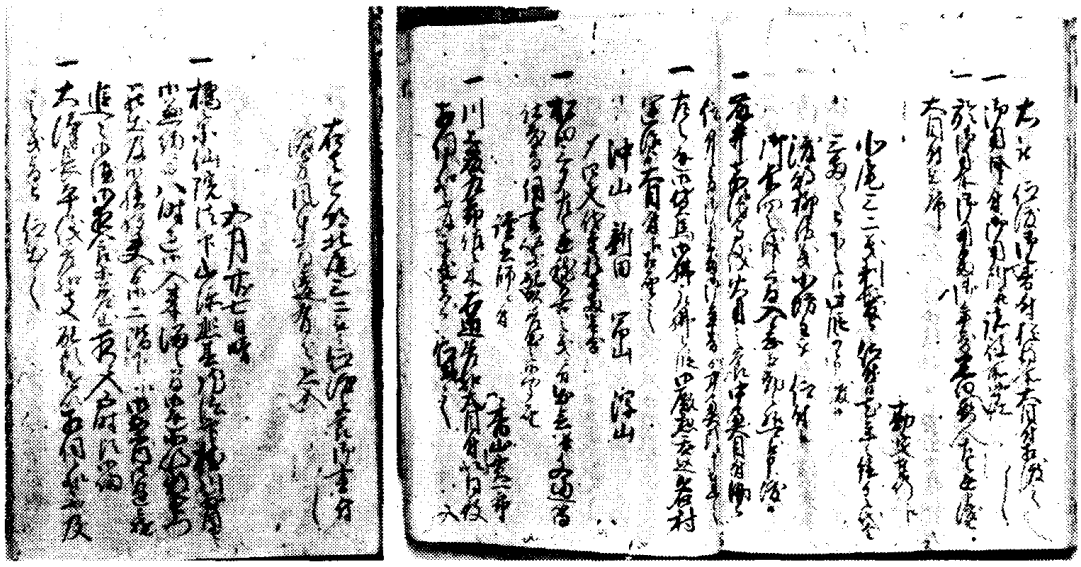
五月廿六日曇

一御用番御年寄黒田要人於宅左之通申渡御年寄
山田主膳列座大目付（＊川上藤九郎）出席
大目付同道
北尾三二
其方儀大役人格御繪師被　召出御擬作
十人扶持被下之候家業出精可相勤候尤
勘定奉行支配被　仰付候
月日
右被　仰渡御書付猶同所大目付相渡之
一御用日ニ付御用所幷諸役所出仕

一於御用所御用番御年寄黒田要人左之通申渡之
大目付出席

勘定奉行江

北尾三二義剃髪被　仰付候尤年々絵具代金
三両ツヽ被下之候此段可被申渡候
渡部柳佐義小坊主被　仰付候
御前向之義候間入念相勤候様可被申渡候
一藤井嘉津馬儀火用之節中奥大目付助被
仰付候旨御用番御年寄ゟ中奥頭江申達之
一左之通御貸馬御拂取拂之段御厩惣呑込各村
運治ゟ大目付江相届之
沖山　新田　冨山　潟山
〆四疋代金拾壱両壱歩
一松田三夕左之通稽古之義二付出會幷文通等
仕度旨伺書以支配頭差出之御聞届
讀書師二付　香山貫一郎
一川上藤九郎佐々木右近差扣大目付以同役
相伺候処不及其義被　仰出之



右者今朝北尾三二被　仰渡候節御書付
渡方風申間違有之恐入

〔＊は私註である。大目付は月番交代で、『江戸日記』寛政六年五月の最初の条によれば、「御年寄　山田要人、大目付　川上藤九郎」とあり、川上藤九郎がその番にあたっている。〕

このように、御用番の黒田要人の役宅において、年寄の山田主膳が同席し、大目付の川上藤九郎が同道して、北尾三二が絵師として召し抱えとなったことの申し渡しが行われている。北尾三二は勘定奉行配下となり、仰せ渡しの書付は大目付より渡されている。また剃髪すべきことと、絵具代を毎年三両ずつ支給する旨が申し渡されている。ちなみに、寛政四壬子年（一七九二）二月の『御家中分限帳』[39]によれば、江戸詰の家臣書き上げのなかに、「高百弐拾石」として大目付川上藤九郎の名がみえ、また文化九年（一八一二）九月の『津山藩分限帳』[40]には、江戸詰年寄であった山田主膳が、家老格となり「高千石」となっている。また年寄の黒田要人については、寛政四年『御家中分限帳』の江戸詰分にその名は見えない。津山藩における黒田家で要職に就いているのは二家あり、文化九年『津山藩分限帳』には年寄格黒田吾妻（弐百五拾石取り）と大番頭格黒田頼母（参百石取り）の名が記載されるが、黒田要人の家系は年寄格黒田吾妻に相当する。ついでながら文化九年『津山藩分限帳』には、小従人格として「一拾人扶持鍬形蕙斎」の記載があり、大役人格として同じ御用絵師の狩野如慶（如水の後継者）の名が載る。

また『江戸日記』寛政六年六月四日には、「蕙斎」改号の記事が次のように載る。

〈資料Ⅴ〉『江戸日記』寛政六年六月四日の条

六月四日　晴

一北尾三二義左之通改号仕度旨伺書同断

三二事

北尾蕙斎

これ以後翌年の寛政七年五月五日まで、蕙斎に関する記事は『江戸日記』には見当たらない。『江戸日記』の寛政七年五月五日の条には、鍛冶橋御門内にある上邸で端午の節会が催され、そこに出仕した江戸詰御年寄三原金太夫以下の家臣衆の名前のなかに「支配頭同道」の「被　召出候付　北尾蕙斎」〈資料Ⅵ〉を見出せる。まさに藩主に対して蕙斎の初目見えの記事である。

蕙斎は、文化七年から八年の藩主松平斉孝の国元帰城に従って津山へ行った〈資料Ⅱ⑥－⑭〉以外は、津山へは行っていないようである。同じ御用絵師の狩野如林（松甫、宗信）や狩野如水（由信）という二つの津山藩狩野家が、御納戸小坊主や御前小坊主として藩主の参勤交代に供をすることが重要な役目であったのに比べると、蕙斎は特別の立場であり、また江戸で版本の挿絵や肉筆画を描くといった作画活動が保証されていた処遇であったともいえよう。またこのことが、津山に「江戸一目図」を除いて作品がほとんど現存しない理由でもある。

蕙斎の文化七・八年の津山滞在に関して、『江戸日記』文化七庚午年（一八一〇）五月二十日の条に興味深い記事が載る。それは次のとおりである。

〈資料Ⅶ〉『江戸日記』文化七年五月二十日の条

五月廿日　晴

（前略）

一正木兵馬義鍬形蕙斎御帰城御供被仰付

罷越候付當分致同居度旨伺書以支配頭

差出仰聞届

一鍬形蕙斎義右同断伺書差出之右同断

これによれば、文化七年五月十八日に津山到着した〈資料Ⅱ⑧〉その翌々日の二十日に、津山滞在中の宿所として正木兵馬なる者の屋敷に同居することについて、正木兵馬と蕙斎から支配頭に伺書が提出され、許可されているのである。従来、蕙斎の津山滞在の実体については不明であったが、ここに手掛かりがつかめたのである。

正木兵馬は、蕙斎と同様に新規召し抱えとなった人物で、『勤書』によれば尾張国出身者で、寛政三年（一七九一）二月に「小従人組」の士分格式で召し抱えられ「四十五俵」を扶持されている。正木兵馬は、軍学者として津山藩に仕え、その住居は津山城下の田町にあてがわれた。したがって蕙斎は津山滞在中この田町にあった正木兵馬宅に寝起きをしたのである。正木兵馬は軍学者としてだけではなく、蕙斎の津山滞在直後の文化九年（一八一二）から同十二年（一八一五）にかけて『作陽誌』の美作国東半分の地誌編纂を行っており、地誌を手がけるほどの多才で優れた能力をもっていた。『作陽誌』は、美作国の西半分については元禄四年（一六九一）に編纂されていたが、東半分については文政期まで未了であったことから、正木兵馬により完結したといってよい。その

功労によって、正木兵馬は文化十二年に「大番組」に昇格し「五十石」取りとなっている。

正木兵馬の屋敷が蕙斎の津山滞在の居所となった理由は、それ以前から両者間の交流があったためか、あるいは藩の命令であったのか、現在のところ不明である。しかし、同じ新参者同士であったことや、蕙斎が絵図の制作などを命じられている御用絵師であるところから、軍学者としての正木兵馬と職務上で交渉をもつべき関係にあったためと推察される。

さて、そのほか『江戸日記』の寛政六・七年分には、蕙斎と深く関係しおそらく御用絵師として召し抱えの斡旋をしたであろうと思われる森島中良（桂川甫餐）の兄にあたる幕府御用医師で蘭学者の桂川甫周が、江戸藩邸に出入りしている記事[41]や、御用絵師の狩野如水に関する記事[42]、あるいは津山藩の御用医師で蘭学医の宇田川玄隨に関する記事[43]など豊富な江戸藩邸の状況がうかがえる。

これらを含めて、『新参御取立』の寛政八年以降の蕙斎の動向は、今後の『江戸日記』『国元日記』『勤書』『家臣分限帳』などの「津山松平藩文書」の精査を今後行い、その成果により別稿を期したい。

四、肉筆画・版本編年一覧表について

浮世絵師としての北尾政美や、御用絵師鍬形蕙斎紹真となってからの作画活動を知るうえで、作品の基礎データカードを作成した。それにより「北尾政美（鍬形蕙斎紹真）の肉筆画・版本関係編年一覧表ｖ1．1」を編じ、平成二年八月二日の江戸町人研究会野辺山合宿において「北尾政美（鍬形蕙斎紹真）の作品について—肉筆画・版本の一覧表と「近世職人尽絵詞」「江戸一目図屏風」など—」という論題で研究報告を行った際に提示した。

この一覧表の作成については、肉筆画は田中達也や内田欽三をはじめとした先学の報告を参考にし、版本は『国書総目録』によって基本リストを作成した上で森銑三の『黄表紙解題』や漆山論文などを参照して作成した。

その後、黄表紙に関しては棚橋正博の『黄表紙総覧』（日本書誌学大系四十八）、絵本類については漆山又四郎の『絵本年表』『近世の絵入本』、また『跡見短期大学図書館蔵百人一首目録稿』などによって補訂し、さらに肉筆画の制作期を再考し、あらたに管見に入った版本や肉筆画を加えた新編の「肉筆画・版本関係編年一覧表ｖ２．３」を作成した。本稿では、その補訂した「ｖ２．３」の版を後掲した。なお、これ以後も精査・研究によりヴァージョンアップされるはずである。

この一覧表は、まだ一々の作品について検証が済んでいないもので、本来ならばまだ手元に置いておくべき性質のものかもしれない。その未定稿をあえて公表したのは、まず管見にはいる先学の業績によるデータを整理し、その段階において全体を見渡そうという意図があったからである。したがって、今後とも精査による増補訂正を加えていくことを再度言及しておく。

「ｖ２．３」では、版本が三百五点、肉筆画が四十一点がリスト・アップされた。また従来北尾政美の作とされていた黄表紙のうち六点が否定された。また著者や、版元との関係も、ある種の傾向をもっていることがうかがえる。これらの分析については、別稿を用意している。

また、北尾政美の浮世絵版画作品である錦絵については、「浮絵仮名手本忠臣蔵」（横大判　十一枚）などの浮絵の作品が多いが、今回はふれることができなかった。田中達也によれば政美画の錦絵は、百十五点確認されているという。(44) 錦絵関係と『浮世絵類考』の北尾政美の記事の検討は、ともに今後の課題としたい。

〔付記〕本稿を成すにあたって、貴重な資料の閲覧・調査を快く許可された津山郷土博物館と多くの御教示をいただいた神尾

齋氏、また江戸町人研究会の報告の際に貴重な御助言をいただいた西山松之助博士をはじめ芳賀登・今田洋三・小池正胤・吉原健一郎・岩田秀行の各氏、それに蕙斎作品に関して種々御教示いただいたサントリー美術館の内田欽三氏、麻布美術工芸館の岡本祐美氏、太田記念美術館の杉本隆一氏、日本浮世絵博物館の酒井雁高氏に記して深く感謝する。

註

（1）『浮世絵類考』は、原本が不詳で、様々な人による校訂や増補が加えられた写本や版本、活字本があるために、原本の編者については、かつては笹屋新七邦教とされてきた。しかし、現在では寛政元年（一七八九）頃に大田蜀山人（南畝）が選じたものが原本で、それに寛政十二年（一八〇〇）に笹屋新七邦教が「付録古今大和絵浮世絵の始系」を付したものであるとの見解が通説となっている。この原撰本に、享和二年（一八〇二）の浮世絵師北尾政演こと戯作者の山東京伝が追考を付し（『追考』）、文政元年-四年（一八一八-二一）頃に戯作者の式亭三馬が按文を加え（『三馬按』）、そして天保四年（一八三三）に浮世絵師溪斎英泉こと无名翁がこれまでの三書を集成し増補して『无名翁隨筆』を編纂した。その『无名翁隨筆』を、弘化元年（一八四四）に江戸の雉子町の町名主であった斎藤月岑がさらに増補し『増補浮世絵類考』と改題した。また慶応四年（一八六八）には、龍田舎秋錦が改選増補した『新増補浮世絵類考』が刊行された経緯を持つ。これらの他に写本が伝わり、T氏所蔵本、曳尾庵本、西山堂本、只誠本、故法室本などが知られている。校訂や増補が加わるにつれて所載される絵師の人数も増加し、当初曳尾庵本の三十七人が、『増補浮世絵類考』では八十六人に、『新増補浮世絵類考』では百二十七人と増えている。このような所収人数の推移は、原撰本の時点から、新たに評価すべき数多くの浮世絵師たちが輩出したことを物語るとともに、校訂や増補にかかわった人の資料探索の成果ともみてよいであろう。しかし、この一連の『浮世絵類考』には資料として信憑性に欠

ける部分もあり、一浮世絵師の詳細を考察する上ではなお他の資料を精査しなければならないのである。『浮世絵類考』自体の研究は、註（2）の仲田勝之助の業績のほか、大曲駒村の「『浮世絵類考』の原選及び其翻刻本に就て」（『書物』二年一号）や、昭和五十四年の由良哲次編『総校日本浮世絵類考』（画文堂）に神宮文庫本の影印版がある。

（2）仲田勝之助編校『浮世絵類考』（岩波文庫）五頁。

（3）同右の本文。

（4）中野三敏「『諸家人名江戸方角分』覚書」（三古會編『近世の學藝―史傳と考證―』）における写楽の研究。中野三敏「「諸家人名江戸方角分」考」（『浮世絵藝術』第四十九号）。浅野秀剛「『諸家人名江戸方角分』に見る春章の初筆」（浮世絵研究会での研究報告）など。

中野によれば、『諸家人名江戸方角分』が大田南畝の手元にあったことを奥書の南畝自筆「文政元年七月五日竹本氏写来　七十翁蜀山人」をもって論証している。

（5）Goncourt (Édmond de), Outamaro. Le peintre des maison vertes. Paris, 1891.

（6）Kurth (Julius), Utamaro. Leipzig, 1907.

（7）飯島は、同年この著とともに『浮世絵便覧』を刊行している。

（8）近年では、永田生慈の『葛飾北斎年譜』をはじめとした一連の北斎研究がある。

（9）江戸時代の絵師は、幕府御用絵師として君臨した「画氏の長」すなわち絵師の「家元」たる狩野家とその一門でなければ社会的地位が保全されなかった。例えば宝暦事件における、その原因の日光廟修理事業に狩野春賀の下職として出仕した宮川長春に対する無報酬や門前払い・暴行などの仕打ちと、仇を討った門人宮川一笑に対する宝暦二年（一七五二）の伊豆新島へ流罪の処置などに、江戸幕府の身分制度を背景とした画壇における狩野派専制がうかがえ

る。

(10) 楢崎宗重「浮世絵概説」の第五章「浮世絵の画様式」(『原色浮世絵大百科事典』第一巻、六十六頁)の井上和雄『浮世絵師伝』所収絵師の職種を分類した一覧表によれば、項目6の「旗下(旗本)、御家人、大御番組、勘定奉行小吏、御蔵方組頭、御旗同心、定火消同心、御小人目付、藩士徒士・用人・作事方、亀山城主、浪人」といった武家である者、項目7の「法橋、法眼」のように受領名を許可された絵師と「津山侯抱絵師」(蕙斎のこと)のほかは、1職人等、2書肆等、3狂言作者等、4渡船場等、5家主等のような所謂町方の職種となっている。また表2「浮世絵師稼業表」(同書百十頁)に百二十名の浮世絵師の職種が掲載されている。

(11) 津山藩松平家の江戸屋敷は、上邸は鍛冶橋御門之内すなわち大名小路にあり、東京都教育庁社会教育部文化課制作『江戸復元図』によれば現在のJR東京駅のほぼ南半分に位置し、中邸は浜町で現在の中央区日本橋蠣殻町一丁目にあたり、下邸は高田と深川海辺大工町で現在の新宿区若松町の東京女子医大の南側あたりと、浜町の中邸から見て隅田川の向岸にあたる小名木川に近い江東区清澄にあった。

(12) ①「文雅の画派、北尾派」(『肉筆浮世絵』第五巻、集英社)。
②「北尾政美(Ⅰ)―(Ⅳ)」(『麻布美術館だより』十九―二十二)。

(13) 津山郷土博物館の学芸員神尾齋氏が、田中氏の問い合わせにより翻刻資料を提供したという。

(14) 西山松之助「真写文化史上の細川重賢」(『成城大学民俗学研究所紀要』第十一集)で、西山は「真写文化」の用語を提案し、その文化史的意義を論じている。

(15) ‖(12)①。

(16) 『浮世繪藝術』第三号所収(浮世繪藝術社)。

(17) ＝(12)。

(18) 「愛山文庫」(元禄十一年から昭和二十七年までの、美作国津山藩主松平家の藩政と松平家の文書・記録類は約一万点、旧藩蔵に所蔵されていた和漢の版本・写本類は約二千七百冊におよぶという)を整理して「―「愛山文庫」―津山松平藩文書―」(『津山郷土館報』第七集、昭和五十年三月)として「津山松平藩文書目録」を作成され、その後も状態のよくない資料を調査・整理・翻刻されている神尾氏によれば、昭和三十四年二月に市へ寄贈される以前では、ほとんど閲覧できる状態ではなかったという。

なお「津山松平藩文書」(「愛山文庫」)を利用した研究に、渡部武の「津山における心学史料(上)(下)」(『津山郷土館報』第十一集・第十三集)・「津山藩の神伝流」(『津山郷土館報』第十二集)、神尾齋の「津山松平領の人口」(『津山郷土館報』第十五集)などがある。

(19) (12)①の田中論文によれば、「菩提寺密蔵院の過去帳は、関東大震災で万延年間以降を残して焼失した。墓石が残るだけである。蕙斎の子孫は、埼玉県内に二家現存するが、蕙斎関係の絵画・文書類は昭和八、九年頃散佚し、一家に蕙斎筆として、太田錦城賛「大喰之図」(絹本著色)・墨絵自画像、他家に「遊女図」(紙本淡彩)・墨絵小品一点がそれぞれ遺存するにすぎない」としていることから、大正十二年の関東大震災以前には密蔵院の鍬形家の「過去帳」が存在したことや、昭和八、九年前には子孫の家に文書が存在していたことなどから、星野論文は菩提寺や子孫の家の資料調査をもとに蕙斎の津山藩抱え絵師になってからの経緯を、昭和七年に著述したものと推察される。田中論文では、津山藩の記録を「星野氏も一覧されたこととは思うが」とあるが、むしろ私は「津山松平藩文書」を星野は見ていないと思う。

(20) 『畫説』第三十三号(昭和十四年九月号、東京美術研究所発行、岩波書店発売)。これには脇本の「蕙斎職人尽絵

詞」なる名品小解が載る。

(21) 「鍬形蕙斎のことども」(『畫説』第三十三号)。この論文は、追記を二つ付けて「鍬形蕙斎雑俎」と改題し、『森銑三著作集』第三巻(中央公論社)に所収されている。

(22) 「青山冗話蕙斎に關聯して」(『畫説』第三十三号)。

(23) 「鍬形蕙斎の繪本」(『畫説』第三十三号)。

(24) 蕙斎に関する研究は、これまであげたものの他は次のものがある。

饗庭篁村「鍬形蕙斎」(『國華』第六十三号)。

「蕙斎」(『國華』第百十号)。

森山生「鍬形蕙斎と鳥文斎栄之」(『浮世絵』第二十一号)。

星野朝陽「北尾蕙斎と風景画」(『美術画報』第四十六編巻五)。

星野朝陽「鍬形蕙斎紹真」(『書画骨董雑誌』第二百七十六号)。

田中一松「鍬形蕙斎の略画式に就て」(『アトリエ』第三巻一号)。

島田筑波「鍬形蕙斎筆両国橋解説」(『浮世絵新誌』第十号)。

井上和雄「山王祭及び鍬形蕙斎」(『武蔵野』第二十三巻六号)。

玉林晴郎「鍬形蕙斎筆の職人尽絵詞」(『浮世絵界』第三巻一号)。

漆山又四郎「北尾政美と其作品」(『書物展望』第八巻一号)。

仲田勝之助『絵本の研究』(昭和二十五年、美術研究社)。

鈴木進「鍬形蕙斎筆職人尽絵巻解題」(『校刊美術史料』第三十六輯、これは『校刊美術史料続篇』第四巻に所収され

ている)。

鈴木進「鍬形蕙斎筆「近世職人尽絵詞」露店書画屋の図」(『古美術』第十七巻六号、宝雲舎)。

大西芳雄「鍬形蕙斎筆東都繁昌之図」(『美術』第五十六号)。

朝倉治彦『江戸職人つくし』(岩崎美術出版、昭和五十五年)。

狩野博幸「北尾政美とその時代」(『仮名手本忠臣蔵　北尾政美展』図録)。

熊原敏男「鍬形蕙斎と徒然草屏風」(『金沢文庫研究』第五十五号)。

松原茂「鍬形蕙斎と徒然草屏風」(『徒然草の絵巻と版本』展図録、神奈川県立金沢文庫、昭和六十一年)。

楢崎宗重「鍬形蕙斎筆山東京伝像」(『國華』第六百六十号)。

楢崎宗重「北尾政美筆金龍山浅草寺筑波遠望図」(『國華』第千百十一号)。

(25) ①「鍬形蕙斎絵本の検討」(『ミューゼアム』第三三八号、昭和五十四年)。

②「広重と蕙斎—写生派の影響について—」(『幕末の百花譜　江戸末期の花鳥八』、学習研究社、昭和五十七年)。

(26) 「鍬形蕙斎筆「江戸一目図屏風」の成立をめぐって」(『サントリー美術館論集』三号、平成元年)。

(27) 『美作の近世絵画—津山狩野派の絵師たち—展図録』(平成元年)所収。

(28) 「津山狩野派の絵師たち」(『美作の近世絵画—津山狩野派の絵師たち—展図録』所収)。

(29) 「ふたつの狩野家」(『博物館だより』第四号、津山郷土博物館発行、平成二年)。これには文化七年に鍬形蕙斎が藩主に従い津山へ行った際、津山藩御用絵師の二つの両狩野家とともに津山城表座敷の絵を制作した状況がうかがえる興味深い資料が載る。それは両狩野家「勤書」の文化七年七月二十一日の条であり、狩野如水の子である如慶(当時十七歳)の「勤書」には「表座敷向画被仰付候」とあり、一方別家の狩野如泉(二十四歳)のそれには「鍬形蕙斎、

狩野如慶義表座敷向画被仰付候、右手伝被仰付候」とあって、蕙斎の〈資料Ⅰ⑩〉（『新参御取立』四）に相当する仕事である。この仕事では、如泉は蕙斎と如慶の手伝い役であり、如泉の方が年長ではあっても如慶（如水系）の狩野家が当時優位であったことがうかがえる。

(30) 「愛山文庫」一三五五・D三／一／四七。表紙「新参御取立四／従正徳至文政二年」。

(31) 「愛山文庫」一三五六・D三／一／四八。表紙「新参御取立壱／文政二年より同十三年迄」。

(32) 鍬形赤子の書き上げは次のとおりである。

『新参御取立』壱

鍬形赤子

一文政七甲申五月十八日亡父羽赤跡式無相
違格式大役人被　仰付候尤家業出精
可致様被　仰付候
一同九丙戌正月十八日養母儀死去
一同八月八日御納戸坊主被　仰付候
一同日酒井信濃守殿御家来相澤良節与
申在娘与縁組仕度之旨願之通被
仰付候
一同十丁亥閏六月十四日妻男子出生
一同九月五日御留守中御納戸坊主代相勤

太儀　思召候

一同十二月廿五日當年致皆勤太儀

思召候

一同十一戊子十二月廿三日當年致皆勤太儀

思召候且又御茶道代相勤候ニ付銀四両

被下之候

一同十二己丑六月廿八日妻男子出生

(33)　『藩史大事典』第六巻の百六十頁参照（雄山閣、平成二年）。

(34)　そのうち現存する「津山松平藩文書」の『新参御取立』によれば、貞享より文政二年までが五十一家、文政二年より十三年までが六十家、天保二年より十三年までが六十一家、弘化元年より嘉永五年までが六十四家、嘉永六年より文久三年までが六十三家ということになっている。（「―「愛山文庫」―津山松平藩文書」による）。

(35)　(37)＝(12)①

(36)　安東靖雄「津山藩政の展開と領民」（『岡山県史』第七巻）に、「津山松平藩文書」の享保十一年（一七二六）『家臣分限帳』による津山藩の「格式・役職表」が掲載されているが、そこには家老（家老・中老）、年寄（年寄・用人）、頭分（奏者・大番頭・小性頭・大目付・中奥頭・徒行頭・小従人頭・物頭・寄合・使番）、番外（番外頭分・番外）、組付（小性組・中奥組・大番組・小従人組）が士分の格式で、その下に大役人、小役人、歩行、坊主が位置し、またその下に足軽、仲間がいる。

大役人の役職としては、小勘者・次祐筆・帳付・料理人・御櫛揚・大工棟梁・大納戸・紙納戸・御坊主頭・絵師・

十分一役荒物方・勘定方・勝手方があげられており、蕙斎は「絵師」の職分から大役人格となったわけである。ちなみに小従人組のなかには「御茶道」の職分があり、蕙斎とその子孫もこの役職に奉仕している。

(38) 「―「愛山文庫」―津山松平藩文書―」(『津山郷土館報』第七集)。

(39) 内扉紙に「寛政四壬子年閏二月／御國／京／大阪(ママ)／江戸／御家中分限帳」とあり、津山藩松平家の家臣に関する書き上げが、国元と京・大坂・江戸の各屋敷に分けて列記されている。津山郷土博物館所蔵本は奥書に「右ハ旧家老安藤幸成ぬしの所蔵原本ニ依り謄写す／昭和四年四月十三日／従八位本澤信美(印)七十八翁」とあることから、家老格式の安藤家所蔵本を本澤信美が写したものであることが知れる。この『御家中分限帳』の江戸詰分には、長坂御前様御合力米として米五百俵を筆頭に、「御年寄当役　三原金太夫」が高三百五拾石として載るのをはじめとして、家臣百名の名前と、仲間の手当、あるいは江戸の菩提寺や津山藩松平家に関係する寺院の書き上げ、それに側室や乳母・女中の分も記載されている。そのなかに宇田川玄隨(名を「普」と脇に記す)の名も見え、そこには「弐拾人扶持、米拾五俵御手当、金拾両薬種料」を支給されている。

(40) 『津山温知会誌』第四冊に所収(明治四十四年刊)。

(41) 桂川甫周に関する記事。

(寛政六年)三月十日晴

一御用番安藤對馬守殿江御留守居田中仲

左之通之御伺書持参御存寄無之候者一両日中ニ

被差出度旨被仰入

私儀去年中臀癰懸癰相煩久々引込

罷在追々快方付出勤仕候処又御旧臘ゟ懸
癰之方致並水役橘宗仙院薬致服用
掛(桂カ)川甫周療治請先者快和ニ相成申候（下略）
（寛政六年）五月廿七日晴
一橘宗仙院法印山添熙春院法印桂川甫周者
御兼幼ニ而八時過御入来溜之間御通小嶋新五右衛門
罷出及御挨拶夫ゟ御二階下江御案内御逢被遊
追々御酒夜食等差上夜ニ入五時頃御帰

（42）

狩野如水に関する記事。
（寛政六年）一一月廿八日晴
一於御用所御用番御年寄三原金太夫左之通
申渡大目付出席　　勘定奉行へ
狩野如水義病気ニ付内願之趣相聞候付
津山江御通ニ成候勝手次第被出立候様
可被申渡候
（寛政六年）三月四日晴
一狩野如水儀左之通出會并文通等仕度旨伺書
以勘定奉行差出之仰聞届

腫物療治　佐藤大三郎
相頼候ニ付

（寛政六年）三月十日晴

一狩野如水佐藤大三郎今暁津山表江出立候旨
支配頭ゟ相届之

（43）宇田川玄隨に関する記事。

（寛政六年）六月二日晴

一國保勇記義忰綱太郎左之通稽古之義ニ付
出會幷文通等為仕度旨伺書以同役大目付差出之
御聞届
手跡師ニ付　宇田川玄隨

（44）「北尾政美（Ⅲ）」（麻布美術館だより No. 21）

北尾政美（鍬形蕙斎紹真）の肉筆画・版本関係編年一覧表ｖ２．３〔小澤　弘編〕　1991/02/23現在

記：本表は、北尾政美（鍬形蕙斎紹真）の肉筆画と版本の編年一覧表である。両者を一表としたのは、作品の年次的傾向、画号、著述者と詞書筆者などの関係を比較検討しようとするために行ったものである。したがって、款記年号の不明な作品の多い肉筆画については、その制作期の推定を署名印章などから想定しうるかぎりの古い時点に置いた。たとえば「蕙斎」や「紹真」号の作品のなかには、先学の研究のによれば一定の曖昧さをもった期間に制作期を推定しているものもあるが、あえてこの表では「寛政９年以降」とした。したがって、実際はずいぶん後の時点での制作(たとえば没年近く)である可能性もありうることを、あらかじめお断りしておく。
また、本表に所収されていない未確認の作品や写本なども現時点で数点あるが、今後の調査によりヴァージョン・アップさせたい。
なお、本表の不備の御指摘とともに、本表に所収されていない北尾政美（鍬形蕙斎紹真）の肉筆画・版本作品や、本稿では所収しなかった摺物・錦絵などの作品について情報をお持ちの方は、ぜひ御教示いただければ幸いである。

凡例：作品名の欄で、｜　｜は現存しない作品。＊を付したものは不確定要素の高い作品。×は否定されるもの。×？は否定されるべきかというもの。
※を付したものは肉筆画、それ以外は版本である。画号の欄で〔　〕内は、署名と特に異なる画号をもった印号を記した。版元の欄で、肉筆画は〔　〕内に所蔵先を記した。
旧を付した所蔵先は、旧蔵のこと。？は推定、あるいは不明のこと。Noの欄で、肉筆画は「Ａ」、版本は「Ｂ」を付して区別し、それぞれ編年順に番号を付した。「Ｘ」は、従来北尾政美作かとされていた作品で完全に否定されるべきもの。
なお、参考のため○を付して関連する記事を年次の最初に記した。

西暦	和暦	作品名	数量	種別	画号〔印章〕	著者	版元〔所蔵〕	No
○安永７年（1778）、黄表紙仕立絵入り咄本「小鍋立」の挿絵を描き（巻末署名に「北尾重政門人三治郎十五歳画」とある）版本画家としてデビュー。								
1778	安永７	小鍋立	２巻１冊	黄表紙・咄本	北尾重政門人三治郎	？	村田屋	B001
1780	安永９	十二支鼠桃太郎	３巻３冊	黄表紙	北尾門人三二郎	文渓堂（米山鼎峨）	岩戸屋	B002
1780	安永９	空音本調子	３巻３冊	黄表紙	北尾門人三二良	窪田春満（南陀伽紫蘭）	西村屋	B003
1780	安永９	龍宮巻	３巻３冊	黄表紙	北尾門人三二郎	窪田春満（南陀伽紫蘭）	松村	B004
1780	安永９	山主我独	２巻２冊	黄表紙	北尾門人三二郎	木雞	岩戸屋	B005
1780	安永９	桃太郎宝噺	３巻３冊	黄表紙	北尾門人三二郎	？	村田屋	B006
1781	天明１	夢想大黒銀	３巻３冊	黄表紙	北尾門人（三二郎）	（伊庭）可笑	岩戸屋	B007

1781	天明1	初夢宝山吹色	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	（伊庭）可笑	岩戸屋	B008
1781	天明1	出見世吉原	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	南陀伽紫蘭	松村	B009
1781	天明1	烟競蕎麦屋真木	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	芝全交	鶴屋	B010
1781	天明1	縁組連理鯰	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	?	村田屋	B011
1781	天明1	菊寿盃	3巻3冊	黄表紙・咄本	北尾政美	?	村田屋	B012
1781	天明1	桃太郎一代記	5巻5冊	黄表紙	北尾政美	?	村田屋	B013
1781	天明1	山本喜内てんぐ噺	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	?	鶴屋	B014
1781	天明1	異国針命之洗濯＊	2巻1冊	黄表紙	（北尾政美？）	（市場）通笑	奥村屋	B015
1781	天明1	交古世むかし噺＊	2巻2冊	黄表紙	（北尾政美？）	芝全交	鶴屋	B016
1781-84?	天明1-4?	浅草図※	1幅	掛幅画	北尾三二郎	―――	〔某家〕	A001
1781-84?	天明1-4?	浅草金龍山遠山風景図※	1幅	掛幅画	北尾三二郎政美	―――	〔出光美術館〕	A002
1781-84?	天明1-4?	浅草金龍山筑波遠望図※	1幅	掛幅画	北尾政美	―――	〔某家〕	A003
1781-84?	天明1-4?	藤娘図※	1幅	掛幅画	北尾三二郎政美	自賛	〔C.D.カーター氏〕	A004
1781-84?	天明1-4?	芸妓図※	1幅	掛幅画	北尾政美	―――	〔フリーア美〕	A005
1781-89?	天明期？	忠臣金短冊	5巻5冊	黄表紙	北尾政美	黄山自惚	西村屋	B017
1781-89?	天明期？	洗濯こうしゃ	1巻1冊	黄表紙・咄本	北尾政美	?	?	B018
1781-89?	天明期？	解春之初雪	1巻1冊	黄表紙	北尾政美	?	西宮（求版？）	B019
1782	天明2	敵討染分手綱	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	（伊庭）可笑	伊勢治	B020
1782	天明2	通神多佳楽富年	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	児童軒雪岨	松村	B021
1782	天明2	飯嫌女者同断何	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	古風（＝政美？）	鶴屋	B022
1782	天明2	化物通人寝語	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	?	伊勢治	B023
1782	天明2	いろはたんか	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	?	村田屋	B024
1782	天明2	助六利生噺	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	?	村田屋	B025
1782	天明2	隅田川土手之青柳	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	?	村田屋	B026
1782	天明2	名響鐘竜頭	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	?	村田屋	B027
1782	天明2	夢仏戯画（黄表紙点取）	1巻1冊	黄表紙・俳諧	北尾政美	?	?	B028
1782	天明2	虫尽紋所＊	2巻2冊	黄表紙	（北尾政美？）	市場通笑	松村	B029

1782	天明2	福わらい＊	2巻2冊	黄表紙	（北尾政美？）	（四方山人？）	村田屋	B030
1782	天明2	風雷神天狗落種＊	2巻2冊	黄表紙	（北尾政美？）	芝全交	鶴屋	B031
1782	天明2	五代源氏貢振袖	1冊	絵本番付	北尾政美		？	B032
1783	天明3	両国納涼図※	1面	扇面画	北尾政美	―――	〔太田美術館〕	A006
1783	天明3	牡丹餅棚有	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	（市場）通笑	奥村屋	B033
1783	天明3	願解小豆餅	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	（市場）通笑	松村	B034
1783	天明3	大食寿之為	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	市場通笑	奥村屋	B035
1783	天明3	七夕姫恋玉章	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	（市場）通笑	（奥村屋？）	B036
1783	天明3	月文さゝげ畑	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	市場通笑	（奥村屋？）	B037
1783	天明3	花の御江戸	2巻1冊	黄表紙	北尾政美	（市場）通笑	西村屋	B038
1783	天明3	御先僻下手横好	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	（伊庭）可笑	松村	B039
1783	天明3	通人宝尽	3巻3冊	黄表紙	政美	（伊庭）可笑	岩戸屋	B040
1783	天明3	寿塩商婚礼	2巻1冊	黄表紙	北尾政美	四方山人	蔦屋	B041
1783	天明3	仲之町昼夢見艸	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	岸田杜芳	伊勢治	B042
1783	天明3	年中故事附録	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	桜川杜芳	伊勢治	B043
1783	天明3	敵討三味線由来	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	南杣笑楚満人	伊勢治	B044
1783	天明3	読と歌通の一字	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	在原艶美	鶴屋	B045
1783	天明3	神楽の拍子	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	黄山自惚	西村屋	B046
1783	天明3	作意妖恐懼感心	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	？	村田屋	B047
1783	天明3	万歳初夢台	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	？	村田屋	B048
1783	天明3	今や開く花の御帳	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	？	西村屋	B049
1783	天明3	早造具三右衛門	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	（伊庭可笑？）	村田屋	B050
1783	天明3	卯年咄	2巻1冊	黄表紙	北尾政美	（市場通笑？）	（村田屋？）	B051
1783	天明3	狂文宝合之記	3冊	狂文・狂歌	北尾政演・北尾政美	元杢網ほか編	山本甚兵衛ほか	B052
1783	天明3	江戸花三升曽我	1冊	絵本番付	北尾政美		？	B053
1783	天明3	能時花升＊	2巻2冊	黄表紙	（北尾政美？）	岸田杜芳	伊勢治	B054
1783	天明3	新銭戯楽通宝＊	2巻2冊	黄表紙	（北尾政美？）	南杣笑楚満人	伊勢治	B055
1783	天明3	玉の春＊	2巻2冊	黄表紙	（北尾政美？）	（伊庭可笑？）	村田屋	B056
1783	天明3	山加羅佐登×？	2巻2冊	黄表紙	（北尾政美×？）	？	鱗形屋	B057

1784	天明4	もふもふもふ怖噺	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	市場通笑	西村屋	B058
1784	天明4	諸事世話無曽我	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	（市場）通笑	松村	B059
1784	天明4	大昔野暮人時分	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	（市場）通笑	奥村屋	B060
1784	天明4	一ツ星大福長者	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	（市場）通笑	奥村屋	B061
1784	天明4	一の富巳成金	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	（市場）通笑	奥村屋	B062
1784	天明4	人間疔膝共談合	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	（市場）通笑	奥村屋	B063
1784	天明4	此奴和日本	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	四方（山人）	蔦屋	B064
1784	天明4	大木の生限	3巻3冊	黄表紙・狂歌	北尾杉皋政美	宿屋飯盛編	蔦屋	B065
1784	天明4	狂言好野暮大名	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	芝桜川岸杜芳	伊勢治	B066
1784	天明4	万象亭戯作濫觴	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	万象亭竹杖為軽	伊勢治	B067
1784	天明4	新米提薩業	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	二本坊中雀志芸	村田屋	B068
1784	天明4	紅葉の雛形	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	（鶴一斎）雀千声	村田屋	B069
1784	天明4	早来恵方道	2巻2冊	黄表紙・狂歌	北尾政美	節藁仲貫	蔦屋	B070
1784	天明4	御舟の吉例	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	武北与野東雲斎	西村屋	B071
1784	天明4	嗟嗚御開帳	2巻	黄表紙	北尾政美	若松万歳門	高津屋伊助	B072
1784	天明4	復讐二葉松	5巻5冊	黄表紙	北尾政美	（眉寿亭？）	鶴屋	B073
1784	天明4	諺野々宮儲	2巻1冊	黄表紙	北尾政美	？	蔦屋	B074
1784	天明4	八重山吹色都	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	（四方赤良？）	蔦屋	B075
1784	天明4	御無文字片沓噺	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	？	西村屋	B076
1784	天明4	金平一之富	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	？	村田屋	B077
1784	天明4	鶴千両亀万両	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	？	村田屋	B078
1784	天明4	通流小謡万八百版	1冊	滑稽本	北尾政美	岸田杜芳	？	B079
1785	天明5	通駕奢半勘	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	（市場）通笑	奥村屋	B080
1785	天明5	無物喰狐聟入	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	（市場）通笑	奥村屋	B081
1785	天明5	二度生子掘出物	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	（市場）通笑	奥村屋	B082
1785	天明5	頼光邪魔入	1巻1冊	黄表紙	北尾政美	唐来参和	蔦屋	B083
1785	天明5	宝山金か敵討	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	恋川好町	？	B084
1785	天明5	昔々噺問屋	1巻1冊	黄表紙	北尾政美	恋川すき町	蔦屋	B085

1785	天明5	涎繰当字清書	1巻1冊	黄表紙	北尾政美	鹿津部真顔（恋川好町）	蔦屋	B086
1785	天明5	馬鹿邨水犬伝	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	二本坊の霍觜芸	西村屋	B087
1785	天明5	三ケ通金持容気	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	二本坊の霍志芸	西村屋	B088
1785	天明5	髪手本通人蔵	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	里山	西村屋	B089
1785	天明5	万歳之嶋台	5巻5冊	黄表紙	北尾政美	黄山自惚	西村屋	B090
1785	天明5	人まね道成寺	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	鳴滝（音人）	西村屋	B091
1785	天明5	売買乎親々胴性能	3巻3冊	黄表紙	政美	（北尾政美？）	鶴屋	B092
1785	天明5	雪矯竹振袖源氏	1冊	絵本番付	政よし		蔦屋	B093
1785	天明5	江都名所図会(燕都名所杖)	1巻or1帖	俳諧・名所	北尾蕙斎政美	崑山阮璋識・夢仏菴撰	野田七兵衛	B094
1785-89?	天明中-	親和染五人男	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	岸田杜芳	伊勢治	B095
1786	天明6	上州七小町	1巻1冊	黄表紙	北尾政美	（朋誠堂）喜三二	蔦屋	B096
1786	天明6	天道大福帳	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	（朋誠堂）喜三二	蔦屋	B097
1786	天明6	しわみの紐	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	（市場）通笑	奥村屋	B098
1786	天明6	無拠五人道行	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	（市場）通笑	奥村屋	B099
1786	天明6	手練偽なし	1巻1冊	黄表紙	北尾政美	（四方山人）	蔦屋	B100
1786	天明6	ヲヤ道成寺	2巻1冊	黄表紙	北尾政美	竹杖為軽	（西宮）	B101
1786	天明6	七福神伊達船遊	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	（森羅亭）万象	鶴屋	B102
1786	天明6	もゝんじい	1巻1冊	黄表紙	北尾政美	万そう（万象亭）	西村屋	B103
1786	天明6	仮名手本混曽我	1巻1冊	黄表紙	北尾政美	万象亭	蔦屋	B104
1786	天明6	四天王荆棘鬼噺	1巻1冊	黄表紙	政よし	万ぞう（万象亭）	西村屋	B105
1786	天明6	壁与見多細身之御太刀	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	蓬莱山人帰橋	鶴屋	B106
1786	天明6	持来糠長目	1巻1冊	黄表紙	北尾政美	（恋川）好町	蔦屋	B107
1786	天明6	去程扨其後	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	唐来参和	蔦屋	B108
1786	天明6	わらふ門	1巻1冊	黄表紙・咄本	（北尾政美）	清遊軒（＝唐来参和？）	蔦屋	B109
1786	天明6	笑南枝	1巻1冊	黄表紙・咄本	北尾杉皋政美	（浮世伊之介）	蔦屋	B110
1786	天明6	夷可美	1巻1冊	黄表紙・咄本	北尾三二政美	莞津喜笑顔	蔦屋	B111
1786	天明6	笑袋	1巻1冊	黄表紙・咄本	（北尾政美）	（十方舎一丸）	蔦屋	B112
1786	天明6	わらひ男	1巻1冊	黄表紙・咄本	（北尾政美）	うき世伊之介	蔦屋	B113

1786	天明6	四人詰律儀一片	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	榎雨露住	西村屋	B114
1786	天明6	女角力濫觴	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	桜川杜芳門人吉田魯芳	西村屋	B115
1786	天明6	敵討浮木之亀山	5巻5冊	黄表紙	北尾政美	薛邏館（蔦屋）	蔦屋	B116
1786？	天明6？	ほへとたんか	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	通笑門人道笑	奥村屋	B117
1786-？	天明6-？	大笑止耄鐘入	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	竹杖為軽	西宮	B118
1786	天明6	可然苦者楽種＊	3巻3冊	黄表紙	（北尾政美？）	（市場通笑）	（奥村屋？）	B119
1787	天明7	化物楽屋異牒	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	山東けいこう（鶏告）	西宮	B120
1787	天明7	正札附息質	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	唐来参和	蔦屋	B121
1787	天明7	古渡日記帳	2巻2冊	黄表紙	（北尾政美）	南杣笑楚満人	伊勢治	B122
1787	天明7	源平軍物語	5巻5冊	黄表紙	北尾蕙斎政美	南杣笑楚満人	和泉屋	B123
1787	天明7	御喰争	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	桜川杜芳	西宮	B124
1787	天明7	拾人三文	3巻3冊	黄表紙	政よし	桜川杜芳	伊勢治	B125
1787	天明7	御目出太平楽	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	桜川杜芳	伊勢治	B126
1787	天明7	現金青本之通	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	芝甘交	鶴屋	B127
1787	天明7	日本一癡鑑	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	万葉亭好町	蔦屋	B128
1787	天明7	今渡唐織曽我	2巻2冊	黄表紙	政美	恋川ゆき町（幸町）	西村屋	B129
1787	天明7	敵討南枝花	2巻2冊	黄表紙	政よし	桜川杜芳	伊勢治	B130
1787	天明7	絵本吾嬬鏡	3巻3冊	絵本・名所	北尾三二政美〔子景〕	万象亭（森島中良）	鶴屋	B131
1787	天明7	絵本都の錦	1巻1冊	絵本・名所	北尾蕙斎政美	万象亭序	吉野屋・前川ほか	B132
1787	天明7	紅毛雑話	5巻5冊	外国地誌	北尾政美・司馬江漢ほか	森島中良編	須原屋	B133
1787	天明7	葉手嫌息子好々＊	3巻3冊	黄表紙	（北尾政美？）	京伝門人山東けいこう	榎本屋	B134
1788	天明8	悦贔屓蝦夷押領	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	恋川春町	蔦屋	B135
1788	天明8	二昔以前の洒落	2巻2冊	黄表紙	北尾政よし	（市場）通笑	西村屋	B136
1788	天明8	吉野屋酒楽	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	（山東）京伝	蔦屋	B137
1788	天明8	恭茄子	3巻3冊	黄表紙	政美よし	桜川杜芳	伊勢治	B138
1788	天明8	海中箱入娘	3巻3冊	黄表紙	北尾政よし	万象亭門人七珎万宝	西宮	B139
1788	天明8	管巻太平記	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	七珍万宝	西村屋	B140
1788	天明8	下戸之蔵開	2巻2冊	黄表紙	政よし	万象門弟千差堂万別	西宮	B141

1788	天明8	夭怪着到牒	2巻2冊	黄表紙	政よし	?	鶴屋	B142
1788	天明8	三茶太平気	2巻2冊	黄表紙	政よし	?	伊勢治	B143
1788	天明8	塵却起二胥睦月	2巻2冊	黄表紙	政よし	?	鶴屋	B144
1788?	天明8?	おとし咄	1巻1冊	黄表紙	北尾政美	三陀羅法師	蔦屋	B145
1788	天明8	下司の知恵*	2巻2冊	黄表紙・咄本	(北尾政美?)	?	西村屋	B146
1789	寛政1	鸚鵡返文武二道	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	寿亭主人春町	蔦屋	B147
1789	寛政1	艶哉女僊人	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	山東京伝	鶴屋	B148
1789	寛政1	奇事中洲話	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	山東京伝	蔦屋	B149
1789	寛政1	面光不背釜	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	けいこふ(山東鶏告)	西宮	B150
1789	寛政1	交見世八人一座	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	けいこふ(山東鶏告)	西宮	B151
1789	寛政1	江戸花俳優贔屓	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	けいこふ(山東鶏告)	西宮	B152
1789	寛政1	引返狸之忍田妻	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	芝全交	鶴屋	B153
1789	寛政1	拝寿仁王参	2巻1冊	黄表紙	北尾政美	芝全交	鶴屋	B154
1789	寛政1	御臍の煮花	2巻2冊	黄表紙・咄本	北尾三二政美	莞津喜笑顔	蔦屋	B155
1789	寛政1	書集千鳥蝶	2巻2冊	黄表紙	政よし	恋川ゆき町	村田屋	B156
1789	寛政1	縞黄金肌黄八丈	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	陽春亭慶賀	大和田安右衛門	B157
1789	寛政1	新米牽頭持	2巻2冊	黄表紙・咄本	北尾杉皐政美	清遊軒(=唐来参和?)	(蔦屋)	B158
1789	寛政1	炉切噺口切(上巻)	2巻2冊	黄表紙・咄本	(北尾政美)・うた麿	うき世伊之助	蔦屋	B159
1789	寛政1	桃太郎昔日記	3巻3冊	黄表紙	政よし	?	村田屋	B160
1789	寛政1	南極駅路雀	1冊	洒落本	(北尾政美)	逸我	?	B161
1789	寛政1	女今川躾絲	1巻1冊	往来物	北尾政美	?	西宮・前川	B162
1789	寛政1	女文章四季詞鑑	1巻1冊	往来物	北尾政美	?	西宮・前川	B163
1789	寛政1	(海舶)来禽図彙	1帖	図譜・動物	蕙斎北尾政美	関盈文撰	松本善兵衛	B164
1789	寛政1	新作咄女郎花*	1巻1冊	黄表紙・咄本	(北尾政美?)	(山東京伝?)	?	B165
1789-01?	寛政期?	大江山鬼神退治*	1帖	絵本?	(北尾政美)		?	B166
1790	寛政2	山鵲鴟蹴転破瓜	3巻3冊	黄表紙	政よし	山東京伝	鶴屋	B167
1790	寛政2	心学早染艸	3巻3冊	黄表紙	政よし	山東京伝	大和田	B168

1790	寛政２	俵藤太振出百薬	３巻３冊	黄表紙	北尾政美	芝全交	鶴屋	B169
1790	寛政２	勧善富蔵雀	２巻２冊	黄表紙	北尾政美	録山人信普	大和田	B170
1790	寛政２	五体総〆而是程	３巻３冊	黄表紙	政よし	（七珍）万宝	榎本屋	B171
1790	寛政２	人間万事西行猫	３巻３冊	黄表紙	政よし	樹下石上	西宮	B172
1790	寛政２	世中豊年蔵	３巻３冊	黄表紙	北尾政美	樹下石上	西宮	B173
1790	寛政２	聴従浅黄髪＊	３巻３冊	黄表紙	（北尾政美？）	三橋二代喜三二	秩父屋	B174
1790	寛政２	栄増眼鏡徳＊	３巻	黄表紙	（北尾政美？）	恋川ゆき町	西宮	B175
1790	寛政２	何糊琥珀塵＊	３巻３冊	黄表紙	（北尾政美？）	有面	西宮	B176
1790	寛政２	絵本武隈松	３巻３冊	絵本	蕙斎北尾政美	万象亭	和泉屋	B177
1790	寛政２	絵本英雄鑑	５巻５冊	絵本	北尾三二		前川六左衛門	B178
1790	寛政２	絵本百物語＊	２巻１冊	滑稽本・狂歌	（北尾政美）	（万象亭？）	西村	B179
1791	寛政３	八百万両金神花	３巻３冊	黄表紙	政よし	（山東）京伝	鶴屋	B180
1791	寛政３	大太刀勇者鋼	５巻５冊	黄表紙	北尾政美	ずるけなし京伝	西村屋	B181
1791	寛政３	至無我人鼻心神	３巻３冊	黄表紙	政よし	竹塚翁東子	和泉屋	B182
1791	寛政３	御評判高雄文覚	３巻３冊	黄表紙	北尾政美	（七珍）万宝	鶴屋	B183
1791	寛政３	龍一談	３巻	黄表紙	北尾政美	（七珍）万宝	西村屋	B184
1791	寛政３	磁鉄頓智才兵衛	３巻３冊	黄表紙	政よし	虚空山人	西村屋	B185
1791	寛政３	餅好酒呑何之画目附	２巻２冊	黄表紙	まさよし	？	村田屋	B186
1791	寛政３	腹筋問答	２巻２冊	黄表紙・咄本	政よし	？	西宮	B187
1791	寛政３	撰要百人一首操鑑	１巻１冊	往来物・和歌	北尾政美	？	前川六左衛門	B188
1791	寛政３	萬壽百人一首錦箱	１冊	和歌	北尾政美	？	？	B189
1791	寛政３	画本纂怪興	２巻１冊	滑稽本・狂歌	北尾政美	森羅万象	西村源六	B190
1791	寛政３	絵本軍略深雪嶽	12巻６冊	黄表紙	北尾政美	樹下石上	西宮弥兵衛	B191
1791	寛政３	路無語帖＊	３巻	黄表紙	（北尾政美？）	千差万別	西村屋	B192
1791	寛政３	女文臺智恵鑑	１巻１冊	往来物	北尾政美	？	前川六左衛門	B193
1791	寛政３	心学あすも見よ	１巻１冊	往来物	（北尾政美）	紀応信序	須原屋	B194
1791	寛政３	増字新刻大節用＊	１冊	往来物	（政美・玉山）	？	？	B195
1792	寛政４	女将門七人化粧	２巻１冊	黄表紙	北尾政美	山東京伝	鶴屋	B196

1792	寛政4	軍略深雪武田菱	3巻3冊	黄表紙	（北尾政美）	樹下石上	西宮	B197
1792	寛政4	山本勘助軍配錦	3巻3冊	黄表紙	（北尾政美）	（樹下石上）	西宮	B198
1792	寛政4	英雄川中嶋合戦	3巻3冊	黄表紙	（北尾政美）	（樹下石上）	西宮	B199
1792	寛政4	武田勝頼勇猛談	3巻3冊	黄表紙	（北尾政美）	樹下石上	西宮	B200
1792	寛政4	凧草紙	5冊	読本	北尾政美	森羅子	？	B201
1792？	寛政4？	武田三代記	12巻12冊	黄表紙	（北尾政美）	樹下石上	西宮	B202
1792	寛政4	鼻下長物語×？	3巻3冊	黄表紙	（重政？＞政美×？）	芝全交	鶴屋	B203
1793	寛政5	宿昔話筆操	2巻2冊	黄表紙	政よし	山東京伝	蔦屋	B204
1793	寛政5	再会親子銭独楽	3巻3冊	黄表紙	政よし	唐来参和	蔦屋	B205
1793	寛政5	荒山水天狗鼻祖	3巻3冊	黄表紙	北尾政美	曲亭馬琴	大和田	B206
1793	寛政5	銘正夢楊柳一腰	3巻3冊	黄表紙	（北尾政美）	馬琴＝无名子	鶴屋	B207
1793	寛政5	登阪宝山道	3巻3冊	黄表紙	北尾蕙斎政美	无名子（馬琴）	鶴屋	B208
1793	寛政5	伊賀越乗掛合羽	5巻5冊	黄表紙	北尾蕙斎政美	碌々市人馬琴	鶴屋	B209
1793	寛政5	衿裂米	1巻1冊	黄表紙・咄本	北尾政美	曲亭馬琴	蔦屋	B210
1793	寛政5	絵本将門一代記	5冊	絵本	北尾蕙斎政美	滝水子	鶴屋	B211
1793	寛政5	白髭明神御渡申×？	3巻3冊	黄表紙	（重政？＞政美×？）	芝全交	鶴屋	B212
○寛政6年（1794）5月26日、北尾三二、津山藩大役人格御絵師として召し抱えられる。6月4日、蕙斎と改号。								
1794	寛政6	親々親道成寺	2巻2冊	黄表紙	北尾政美	竹杖為軽	西宮	B213
1794	寛政6	旨趣向棚牡丹餅	2巻2冊	黄表紙	政よし	樹下石上	西宮	B214
1794	寛政6	大福長者蔵	3巻3冊	黄表紙	政よし	樹下石上	西宮	B215
1794	寛政6	百福寿老人	3巻3冊	黄表紙	政よし	樹下石上	榎本屋	B216
1793	寛政6	工面壁観師大通	3巻3冊	黄表紙	政よし	森羅亭（万宝）	榎本屋	B217
1794	寛政6	趣向気工	2巻2冊	黄表紙	政よし	千差万別	榎本屋	B218
1794	寛政6	笑倍噺問屋	1巻1冊	黄表紙・咄本	（北尾政美）	（蔦）唐丸	蔦屋	B219
1794	寛政6	諸職画譜	2冊	画譜	（北尾蕙斎）		須原屋	B220
1794	寛政6	噺の入船＊	1巻1冊	黄表紙・咄本	北尾政美	（蔦唐丸）	蔦屋	B221
1794	寛政6	絵本武勇一の筆	2巻2冊	絵本	蕙斎北尾政美	宿屋（飯盛）序	泉屋市兵衛	B222
1794	寛政6	女今川小倉文庫	1巻1冊	往来物・和歌	北尾三二		西村源六	B223

1795	寛政７	花笑顔相指南枝	３巻３冊	黄表紙	政よし	森羅亭（万象）	泉市	B224
1795	寛政７	諸職画鏡（諸職画鑑）	１冊	画譜	蕙斎北尾政美	申椒堂主人序	須原屋	B225
1795	寛政７	略画式	１冊	画手本	蕙斎北尾政美		須原屋	B226
1795	寛政７	落ばなし＊	１巻１冊	黄表紙・咄本	（北尾政美？）	？	（蔦屋）	B227
1795	寛政７	頼政一代記×？	５巻５冊	黄表紙	（政美×？）	南仙笑楚満人	榎本屋	B228
1796	寛政８	鄙都言種（前編）	２巻２冊		蕙斎（前編）	森羅子（前編）	須原屋	B229
1796	寛政８	金撰狂歌集（秋ノ部）	１巻１冊	狂歌	蕙斎北尾政美	酒月米人	？	B230
1796	寛政８	休息歌仙	１冊	狂歌	北尾政美	鳴滝音人編	？	B231
1796？	寛政８？	浅草寺廼一家裏	２巻２冊	黄表紙	北尾政美	？	西村屋	B232
1796	寛政８	怪席料理献立×？	３巻３冊	黄表紙	（政美×？）	望月窓秋輔	榎本屋	B233
○寛政９年（1797）６月、藩主の命により狩野養川院惟信の門人となり、紹真と名乗る。６月11日、鍬形と改姓。								
1797	寛政９	百人一首	１冊	和歌	北尾政美		蔦屋・西村ほか	B234
1797	寛政９	東海道名所図会	６巻６冊	名所	蕙斎政美・春泉斎ほか	秋里舜福（籬島）編	柳原・須原屋ほか	B235
1797	寛政９	鳥獣略画式	１巻１冊	画手本	蕙斎		須原屋	B236
1797	寛政９	蕙斎略画式（略画式）	１巻１冊	画手本	蕙斎鍬形紹真		須原屋	B237
1797－？	寛政９-？	吉原十二時絵巻（写本）※	１巻	絵巻	鍬形紹真	岩瀬醒（山東京伝）詞書	〔国会図書館〕	A007
1797－？	寛政９-？	江戸鳥瞰（一覧）図※	１幅	掛幅画	蕙斎紹真	―――	〔日本浮世博〕	A008
1797－？	寛政９-？	江戸海岸風景図※	１巻	絵巻	紹真	―――	〔秋田県立博〕	A009
1797－？	寛政９-？	飛鳥山図※	１幅	掛幅画	蕙斎〔紹真〕	―――	〔東京国立博〕	A010
1797－？	寛政９-？	伊勢物語図※	１幅	掛幅画	紹真	―――	〔東京国立博〕	A011
1797－？	寛政９-？	朝妻船図※	１幅	掛幅画	紹真	―――	〔麻布工芸館〕	A012
1797－？	寛政９-？	つくばね図※	１幅	掛幅画	紹真〔蕙斎〕	―――	〔出光美術館〕	A013
1797－？	寛政９-？	高砂図※	１幅	掛幅画	紹真	―――	〔奈良県立美〕	A014
1797－？	寛政９-？	草虫図※	２幅	掛幅画	紹真	―――	〔某家〕	A015
1797－？	寛政９-？	大喰之図※	１幅	掛幅画	紹真	太田錦城賛	〔鍬形家末Ａ〕	A016
1797－？	寛政９-？	美人物思い図※	１幅	掛幅画	紹真	―――	〔某家〕	A017

1797－？	寛政９-？	遊女図※	１幅	掛幅画	紹真	自賛？	〔鍬形家末Ｂ〕	A018
1797－？	寛政９-？	観桜図※	１幅	掛幅画	紹真	―――	〔太田美術館〕	A019
1797－？	寛政９-？	両国の月に飛鳥山の花図※	２幅	掛幅画	紹真	―――	〔太田美術館〕	A020
1797－？	寛政９-？	桜下歌舞美人図※	１幅	掛幅画	蕙斎紹真	―――	〔日本浮世博〕	A021
1797－？	寛政９-？	柳下男女図※	１幅	掛幅画	蕙斎紹真	蜀山人賛	〔日本浮世博〕	A022
1797－？	寛政９-？	美人図※	１幅	掛幅画	紹真	春海賛	〔麻布工芸館〕	A023
1798	寛政10	絵本大江山	２冊	絵本	北尾政美	万象亭序	永楽屋	B238
1798	寛政10	月下清談＊	１冊	読本	（北尾政美？）	森島森羅子	？	B239
1799	寛政11	｛五郎丸捕時宗図※｝	１面	絵馬	（紹真）	―――	〔旧浅草寺〕	A024
1799	寛政11	人物略画式	１巻１冊	画手本	蕙斎〔紹真〕		須原屋	B240
1800	寛政12	絵本尊氏勲功記	10巻５冊	黄表紙	北尾政美	北尾政美作・馬琴閲	鶴屋・丁子屋	B241
1800	寛政12	絵本楠二代軍記	10巻５冊	黄表紙	北尾政美	北尾政美作・馬琴閲	鶴屋・丁子屋	B242
1800	寛政12	絵本太平記	10冊	絵本	北尾政美	曲亭馬琴閲	鶴屋・丁子屋	B243
1800	寛政12	画手本	１帖	画手本	（蕙斎）		須原屋	B244
1800	寛政12	山水略画式	１巻１冊	画手本	蕙斎〔紹真〕		須原屋	B245
1800	寛政12	心機一拂	３冊	画手本？	蕙斎		永楽屋	B246
1801	享和１	武器図札（写本）※	２帖	図譜・武具	鍬形蕙斎紹真	正木輝雄	〔国会図書館〕	A025
1801	享和１	女錦百人一首寶織	１巻１冊	往来物・和歌	北尾政美	？	前川六左衛門	B247
1801	享和１	女撰要寶織	１巻１冊	往来物	北尾政美	？	前川六左衛門	B248
1801	享和１	群玉百人一首筆錦＊	１巻１冊	和歌？	北尾政美	？	前川六左衛門	B249
1801	享和１	万寿百人一首錦箱＊	１巻１冊	黄表紙・和歌	北尾政美	？	前川六左衛門	B250
1801	享和１	口拍子＊	２冊	咄本？	（北尾政美）	鈍々亭和樽	？	B251
1801	享和１	女文寶知恵＊	１巻１冊	往来物	（北尾政美）	？	？	B252
1801	享和１	女万葉姫文庫＊	１巻１冊	往来物	（北尾政美）	？	？	B253
1801	享和１	女用傍訓大全＊	１巻１冊	往来物	（北尾政美）	？	？	B254

1802	享和２	龍乃宮津子（魚貝譜）	１巻１冊	俳諧・魚貝	蕙斎	一陽井（谷）素外	須原屋	B255
1802	享和２	海之幸＊	１冊	魚貝？	（鍬形蕙斎）		？	B256
1803	享和３	東都繁昌図巻※	２巻	絵巻	紹真	松平定縝ほか	〔某家〕	A026
1803	享和３	絵本江戸桜	２巻２冊	絵本・名所？	（北尾政美）		？	B257
1803	享和３	絵本鏡山烈女功＊	５巻５冊	読本	（蕙斎？）	川関惟充	？	B258
1804-06	文化1-3	近世職人尽絵詞※	３巻	絵巻	鍬形蕙斎	山東京伝ほか詞書	〔東京国立博〕	A027
1806	文化３	敵討春告鳥＊	５巻５冊	黄表紙	（北尾政美×？）	眉寿亭	鶴屋	B259
1808	文化５	蕙斎略画	１冊	画手本	鍬形蕙斎			B260
1808	文化５	人物略画式	１冊	画手本	蕙斎		鍬形氏蔵板	B261
1808	文化５	人物略画＊	１冊	画手本	（鍬形蕙斎）		？	B262
1808	文化５	諺画苑	１冊	画譜・諺	蕙斎〔紹真〕		鍬形氏蔵板	B263
○文化６年（1809）12月18日までに御城普請絵図を描くに付き報償金。								
1809	文化６	江戸一目図屏風※	６曲１隻	屏風絵	紹真〔紹真〕	―――	〔津山郷土博〕	A028
○文化７年（1810）５月18日、藩主帰城につき蕙斎お供にて津山着。同８年３月18日、津山出立。奥座敷向の絵、張付・杉戸絵を描くに付き報償金。								
1810-11	文化7-8	徒然草図屏風※	６曲１双	屏風絵	紹真	―――	〔金沢文庫〕	A029
○文化８年（1811）12月18日、小従人組に昇格。								
○文化９年（1812）、羽赤と改号。								
1810-12	文化９	花濺涙帖	１帖	画譜・追悼集	紹真・文晃ほか	？	？	B264
1813	文化10	黒髪山絵巻※	２巻	絵巻	（鍬形蕙斎）	―――	〔寛永寺〕	A030
1813	文化10	女訓孝経	１冊	教訓	（鍬形蕙斎）	田尻梅翁	？	B265
1813	文化10	草花略画式	１冊	画手本	蕙斎	平由豆流序	須原屋	B266
1813	文化10	魚貝略画式	１冊	画手本・魚貝	蕙斎〔紹真〕		福定藤兵衛	B267

1813	文化10	蕙斎絵手本＊	1冊	画手本	（鍬形蕙斎）		?	B268
1813	文化10	絵本孝経	2冊	絵本・教訓	戴斗・蕙斎	?	前川・西村	B269
1813	文化10	孝経絵抄＊	1冊	教訓	（鍬形蕙斎？）		?	B270
1814	文化11	心機一掃	3巻3冊	画手本？	蕙斎	蜀山人序	永楽屋	B271
1815	文化12	手習百人一首	1冊	和歌	蕙斎〔紹真〕	7代目三升	?	B272
1816-9?	文化末？	遊女と侍図※	1幅	掛幅画	蕙斎紹真	蜀山人賛	〔旧清水晴嵐〕	A031
1816	文化13	山東京伝像※	1幅	掛幅画	蕙斎紹真	―――	〔某家〕	A032
1816	文化13	俳家奇人談	3巻3冊	俳諧・伝記	蕙斎紹真	竹内玄玄一	文生堂・仙鶴堂ほか	B273
1818	文政1	三哲小伝	1冊	伝記	鍬形紹真	立綱撰	上総睦堂蔵板	B274
1818	文政1	相馬日記	4巻4冊	紀行	蕙斎紹真	高田（小山田）與清	伊勢屋忠右衛門	B275

○文政2年（1819）11月5日、杉戸・戸袋の絵を描くに付き報償金。

1820	文政3	天満宮御傳記略	2巻2冊	伝記	蕙斎〔紹真〕	平田篤胤	?	B276
1821	文政4	隅田川図屏風※	8曲1隻	屏風絵	蕙斎〔紹真〕	―――	〔サントリー〕	A033
1821	文政4	江戸駿河町三井両替店図※	1幅	掛幅画	蕙斎〔紹真〕	―――	〔三井銀行〕	A034
1822	文政5	料理通（初編）	4編4冊	料理	蕙斎・文晃・抱一ほか	八百善主人	?	B277

○文政6年（1823）12月18日、絵を度々描くに付き報償。

1823	文政6	略画苑	1冊	画手本	蕙斎〔紹真〕		鍬形氏蔵板	B278
1823	文政6	妙正物語	2冊	仮名草子？	蕙斎〔紹真〕	日典	法華宗門蔵板	B279

○文政7年（1824）3月22日、鍬形蕙斎（羽赤）死去。

1824？	文政7？	月見美人図※	1幅	掛幅画	紹真	（酒井）抱一賛	〔麻布工芸館〕	A035

1824	文政7	十六夜日記残月鈔	3冊	注釈	喜多村節信・鍬形紹真	小山田與清・北条時隣	出雲守久次郎	B280
1825	文政8	今様職人尽歌合	2冊	狂歌	紹真	銕廼屋大門・五柳園一人	新泉園（鷺丸）	B281
1839	天保10	蕙斎麁画（初編）	5編5冊	画手本？	鍬形蕙斎		永楽屋	B282
1851	嘉永4	蕙斎略画式	1冊？	画手本	蕙斎鍬形紹真		？	B283
？	？	十二月御巻物※	2巻	絵巻	（北尾政美）	―――	〔京都大学〕	A036
？	？	吉原図※	1幅	掛幅画	（紹真？）	蜀山人賛	〔旧松浦静山〕	A037
？	？	自画像※	1幅	墨画	（蕙斎？）	―――	〔鍬形家末Ａ〕	A038
？	？	蕙斎下絵※	1冊	下絵	（鍬形蕙斎）	―――	〔東京大学〕	A039
？	？	菊図※？	1幅	掛幅画	（蕙斎？）	―――	〔津山郷土博〕	A040
？	？	端午図※？	1幅	掛幅画	（蕙斎？）	―――	〔某家〕	A041
？	？	苾摺前九年	5巻5冊	黄表紙	北尾政美	？	西宮	B284
？	？	魁先後軍配	5巻5冊	黄表紙	（北尾政美？）	？	西宮	B285
？	？	善悪和睦巵	2巻2冊	黄表紙	（北尾政美？）	？	西宮	B286
？	？	後難朝緑刃	3巻3冊	黄表紙	（北尾政美？）	？	西宮	B287
？	？	韓泰平武者	3巻3冊	黄表紙	（北尾政美？）	？	西宮	B288
？	？	初舞台＊	3巻？	黄表紙	（北尾政美？）	？	？	B289
？	？	ことわざ＊	2巻	黄表紙	（北尾政美？）	？	？	B290
？	？	人間境界心の善悪＊	2巻	黄表紙	（北尾政美？）	山東京伝	？	B291
？	？	万たび物語＊	5巻	黄表紙	（北尾政美？）	黄山自惚	？	B292
？	？	はくろ＊	3巻	黄表紙・狂歌	（北尾政美？）	哥麿	？	B293
？	？	教訓いろは譬＊	1冊	教訓	（鍬形蕙斎？）	？	？	B294
？	？	古代画半切色々	2冊	画譜？	（鍬形蕙斎？）	（鍬形蕙斎？）	―――	B295
？	？	浮世三十六形撰＊	2巻	合巻	（北尾政美？）	山東京伝	？	B296
？	？	郎花＊	2巻	咄本	（北尾政美？）	山東京伝	？	B297
？	？	（はなし）＊	1冊	咄本	北尾政美	？	？	B298
？	？	新作仲人口＊	1冊	咄本	（北尾政美？）	？	？	B299

?	?	吉原風俗＊	1冊？	黒本	（北尾政美？）	?	?	B300
?	?	菊壽百人一首濱真砂	1巻1冊	往来物・和歌	鍬形蕙斎	佐藤史鼎	菊屋	B301
?	?	菊壽百人一首操文庫	1巻1冊	往来物・和歌	（鍬形蕙斎？）	佐藤史鼎	東京江島喜兵衛	B302
?	?	絵本咲分勇者＊	2巻2冊	絵本	（北尾政美？）	川関文思撰	?	B303
?	?	絵本平家物語×？	10巻	絵本	（北尾政美？）	?	?	B304
?	?	奥州軍記×？	10巻	実録	（北尾政美？）	万象亭	?	B305

□従来北尾政美画と見做されていた作品の否定されるべきもの一覧

1781	天明1	故事附曽我×	3巻1冊	黄表紙	旭光（＝政美×）	鍋町当世	鶴屋？	X001
1781？	天明1？	お茶あがれ×	2巻1冊	黄表紙・咄本	北尾政演（政美×）	?	鶴屋	X002
1784	天明5	鬼通意嘘島物語×	3巻3冊	黄表紙	旭光（＝政美×）	録山人信鮒	伊勢治	X003
1785	天明5	星月夜坊主道行×	2巻2冊	黄表紙	旭光（＝政美×）	録山人信鮒		X004
1792	寛政4	神伝路考由×	2巻2冊	黄表紙	歌川豊国（政美×）	気象天業（＝蕙斎×）		X005
1803	享和3	絵本三鼎倭孔明×	5巻3冊	黄表紙	北尾重政（政美×）	睦酒亭老人	西村屋	X006

＜所蔵先略称の正式名称一覧＞

フリーア美＝フリーア美術館（米国）．太田美術館＝太田記念美術館．国会図書館＝国立国会図書館．秋田県立博＝秋田県立博物館．
東京国立博＝東京国立博物館．麻布工芸館＝麻布美術工芸館寄託．奈良県立美＝奈良県立美術館．日本浮世博＝日本浮世絵博物館．
津山郷土博＝津山市立津山郷土博物館．サントリー＝サントリー美術館．鍬形家末A＝鍬形家末裔A家．鍬形家末B＝鍬形家末裔B家．